

廃止された部局

薬学部

第1章 前史

廃藩置県公布直後の明治4年(1871)7月18日文部省が創設され、翌5年8月の「学制」制定によって全国を8大学区に分割、各大学区に中学区および小学区が設けられた。薬学関係の高等教育機関のスタートとなったのは、第一大学区医学校に付設された製薬学科(予科2年、本科3年)であり、下山順一郎、丹波敬三らが入学した。第一大学区医学校は、明治7年5月東京医学校と改称され、ドイツから帰朝したばかりの柴田承桂が日本人として初の製薬学科教授に就任した。明治10年に到り東京医学校は東京開成学校と合併し東京大学となり、東京大学医学部製薬化学科と改称された。さらに、9年後の明治19年に学制の大改革がなされ、帝国大学令公布(明治19年3月)をうけ帝国大学医科大学薬学科となった。明治26年、改正帝国大学令により講座が設置され、下山順一郎(薬学第1・生薬学)、丹波敬三(薬学第2・衛生裁判化学)、長井長義(薬学第3・薬化学)が担当した。

明治15年7月18日には、薬業の現場担当者(薬剤師等)の養成を目的として「薬学校通則」が制定された。これを受けて、全国各地(京都、名古屋、熊本、大阪、岡山等)に私立薬学校が設立されたが、薬学校を教育水準(教員資格)を異にする甲乙2種と定めたこともあって実績が挙がらず、経営難で廃校を余儀なくされる例が少なくなかった。そのため文部省は甲種の教育を充実すべく、明治22年4月、第一から第五の高等中学校医学部に薬学科を付設した(千葉、仙台、岡山、金沢、長崎)。27年3月、第一回卒業生を輩出、同年6月25日の高等学校令公布によって各高等学校医学部薬学科に名称変更(岡山を除く)、さらに34年医学部が独立し医専となり薬学科は各医専付属となった。

以上は、富山大学薬学部の原点たる共立富山薬学

校が、明治26年8月に設立認可される頃までの、明治新政下の学制に基づく薬学教育制度変遷の概略であるが、その間、富山の伝統的産業である薬業は売薬規制の対応に苦慮した。医療の分野に於ても文明開化を急ぐ新政府は、洋薬への傾斜を強め、売薬に信頼性(品質・安全性・薬効)乏しきもの少なからずとして、明治4年12月「売薬取締規則」が布達され、売薬業界は大混乱に陥った。しかし旧来の漢方薬自体の効能・検査(品質基準)が未整備であること、売薬のみを取り締っても僻地庶民に益しないことが認識され、間もなく廃止された。

明治5年2月、文部省に衛生行政機関・医務課が設置され、翌6年3月医務局に昇格した。その頃、欧米医薬制度調査より帰国したばかりの長與専斎(2代目医務局長)はドイツ人教師の協力を得て薬品取締条項を立案、それに基づき文部省は6年5月「薬剤取締之法」を布達した。その主な内容は、薬舗(薬局)、薬舗主(薬剤師)、薬舗数調整、医家の薬品販売禁止(医薬分業)、日本薬局方の制定、毒薬販売規制、薬価令、薬品監視、司薬局(薬品試験所)、製剤学校(薬学校)等28項目の計画を明示したものであった。そして、同年6月下旬に薬業調査が実施され、12月に売薬検査が再開された。

さらに翌明治7年3月、東京司薬場(薬品検査の中枢機関)が開設され薬品監視体制が整い、毒劇薬(31種)の取締りを3府(東京、大阪、京都)に布達、ついで12月に「不良薬品取締罰則」が東京府に通達された。新川県権令・山田秀典は明治8年(1875)3月、県下(新川・婦負・砺波・射水)の売薬業者総代を招集し「管下反魂丹等の売薬は全国に普及し営業者は数千人の多きに達し、実に特産の第一に位せるが惜しい哉薬品は旧慣を墨守し草根木皮を以て調製するに過ぎざれば座して将来の衰頽を

待つものの如し、今の時に及んで泰西文明国の良法を採取し互いに協同結社して益々売薬の振起を図るべし」と告諭した。これを受けて業者らは「開化変

換に随い因循姑息に涉り候ては衰微の基と考察し、往々漢方は消却し泰西の方法に変革進歩」せんものと会社設立の機運が生じた。

第 1 節 富山における薬学教育の芽生えと薬剤師教育

明治4年7月の廃藩置県後、16年5月に新川・婦負・砺波・射水の4郡を擁する富山県が誕生するまで加賀藩の支藩に位置づけられ、明治初期の薬業に係る業務・教育面の進展においても加賀藩の施策に従う事が少なくなかった。慶応3年(1867)に金沢・卯辰養生所が設立され、舎密局と薬圃を置き高岡市出身の高峰精一(高峰讓吉の父)が総理に任ぜられた。明治3年2月藩家老邸に開設された医学館に養生所学生を移し、12月に病院を付設、舎密局は化学・調剤実習所に当てられた。翌4年春、医学館にオランダ人一等軍医が着任し薬剤師養成の必要性を説き理化学校に改組、医学のほか薬学専習者の教育を充実させた。廃藩置県の翌5年8月、医学館を県立金沢病院と改称し製薬学科を設け、明治7年に製薬学科を薬局学科と改め薬学教育に力点を置いた。

明治9年(1876)4月、新川県(新川・婦負・砺波・射水の4郡)が石川県に編入されたのをうけ、10月に金沢病院富山分院が富山市千石町に開設されたが、程なく石川県富山病院に名称変更され医学所(富山医学所)を分設、富山市総曲輪(現在の市民プラザの地)に病院が建てられた。明治11年(1878)6月医学所規則が改定され、薬舗学の一課を設け、束修(入学金)一円・月謝50銭とした。富山における公的薬学教育のスタートであった。

明治12年5月、東京大学医学部製薬学科別科の第一期修了生・久能功が病院薬局長に赴任、ついで明治13年(1880)6月富山病院に高峰精一が着任、医学所に製薬学科が併設された。明治14年、富山医学所は金沢医学校に合併された。明治16年5月、石川県から分離して富山県が新たに誕生し、石川県富山病院は富山県富山病院と改称された。久能功薬局長はそれ以前に九州に転じたようだが、その後明治15年6月東京大学医学部別科製薬学科卒業の松江房雄を薬局長に迎えた。

明治17年9月石川県は第1回薬舗開業試験を実施した。富山県では22年1月「薬舗試験規則」を制定、第1回薬舗開業試験は恐らく同年春に、第2回の試験は同年11月14-18日に実施された(受験者10名)。第3回は翌23年1月20-23日に富山県庁内警察本部長上にて実施されており、試験主事に本庁の綾部文蔵・土屋直二郎、試験委員には公立新婦病院長長池棟二郎および薬局長松江房雄があたり、2月25日受験者18名全員に免許状が下付された。富山県では薬舗開業試験は以上3回実施され、病院薬局が初期の薬学教育の場であり、受験生の知識習得に役立った。

明治13年4月、日本薬学会が創立された。その約2ヵ月前に「薬品取扱規則」が制定され、薬品を注意薬・劇薬・毒薬に分類し取締規制が強化された。そして、明治19年6月内務省は日本薬局方(収載薬品数470)を公布、翌20年7月より施行とした。この薬局方を法的に実効あるものとするため、22年3月「薬品営業・薬品取扱規則(薬律)」が公布されたが、その趣旨は、従来の薬舗と薬種商を別ち、薬舗主改め薬剤師の資格を定め医薬の取扱を郑重にせしめ、薬種商は之を仲買商の位置に置き毒薬・劇薬の小売りを許さず、製薬者は自己の製品而已容器の俣販売せしむる等漸く薬品取締に万全を期することであった。さらに、「医学と薬学が共に独立の専門学であり、其の範囲頗る広く固より一人に併有すべきものに非ず、また到底兼修すること能わざるが故に欧米諸国では各々其業を分って行政上の便宜及び学術上の進歩に於ても分業の便益に頼ること少なからずとしながらも、わが国の現状から暫く医師の調剤を許す」とした。此の法律によって「薬剤師」なる職名が生まれ、また医師が薬剤を処方し薬剤師は之を調合するの原則を明示し、薬局の設備・処方の授受、薬局方諸規定の実施、薬局薬品の巡視が新たに定められた。同時に三つの省令、即ち薬剤師試験

規則・薬品巡視規則・毒劇薬品目に係る省令が発布されたのである。

明治23年（1890）8月帝国大学医科大学教授・丹波敬三が来富し、中田清兵衛（14代）、邨沢金広（初代）等の案内で広貫堂を視察後、富山市の新婦病院において参集の薬業関係者を前に「今後の信用保持には効能の著しい売薬を製出しなければならぬ……一例を挙げれば「妙振り出し」などは昔時非常に需要があったが、今はこれに代わって「アンチフェブリン」を購買して自ら服用するものが多いと聞く……故に余の愚考によれば従来の売薬に改良を加えてあくまでも其の販路の減縮を防遏せねばならない。其の方策は他にはない。当市の市民一致して

売薬の原料中有力薬を配合し得るの手段を講究するがよい。蓋し目下政府にも禁令あり、これの実行は一般衛生上にも劇薬の注意を怠れないから極めて困難な仕事といわねばならぬ。本邦売薬家の多くは薬学の知識が無く、劇薬等の配剤取扱を許せば小児に利刃を預けるようなものだ。よって売薬家は一層精励して薬学上の知識を得ることに心掛け、十分に薬学教育を受けた者に配剤取扱を任せれば自然に有力の薬剤を発売して世上の信用を回復しうるばかりか、政府の禁令にも影響しないともかぎらない。当市において目下の急務とする売薬の改良には薬剤師・薬学士を養成することである」旨の講演を行ない、薬学校設立の急務なることを力説した。

第2節 共立富山薬学校の創設

富山における薬学校設立の機運漸く熟し、設立発起人会が明治26年（1893）5月19日、富山市北新町八清楼で開催され「共立富山薬学校」の早期実現について合意、8月3日私立薬学校設置の認可を得た。なお、この年の6月に日本薬剤師会の設立あり、8月には帝国大学官制に薬局および薬局長が明文化された。

共立富山薬学校の敷地は富山市梅沢町・広貫堂の向側176坪に用意され、約20坪の校舎を計画、敷地および校舎に千円、器械類に五百円の予算を計上した。それらの創設経費は、富山市の補助金三百円の外、広貫堂、師天堂、振声堂、保寿堂、弘明堂、精寿堂等、多数有志の寄付金によって賄われた。校舎は明治27年1月末に落成、本館の階上に講堂・応接室、階下に事務・教員・薬品・小使の各室があてられ、本館に続く平屋には普通教室と製煉・天秤・蒸留・分析・調剤・衛生・裁判化学の各室が配置された。現在、この地は「あざみ通り」に面しており、横田嘉右衛門先生の揮毫になる記念碑「富山薬学発祥之地」が道路脇に見られる。これは、昭和40年（1965）10月富山大学薬学部創立75周年を記念して建立されたもので、碑には奥田に所在した旧富山薬専校の門柱の一つを用いた（富山市議池上義政、同窓の北川承三の労に負う所が大きい）。

共立富山薬学校の開校始業式は明治27年2月1

日、本科生25名および速成科15名を迎えて挙行され、教員には次の四氏が委嘱された。

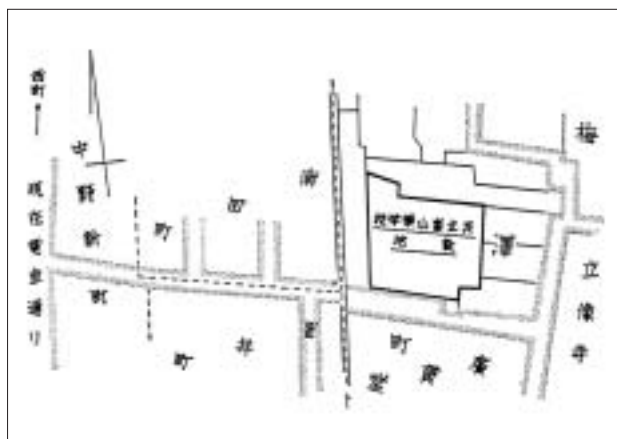
講師：桜井勘六（本科：化学・植物学／速成科：化学）、日野五七郎（速成科：植物学・物理学）
嘱託：田村輔三郎（本科：物理学）、佐多愛彦（本科：ドイツ語）

講師の桜井勘六（1865 - 1918）は水橋出身、明治18年12月東京大学製薬学科別科3年の課程を修了、引き続き大学にて勉学を続け同25年富山県技手となった。日野五七郎（1868 - 1935）は新庄出身、明治24年私立東京薬学校を卒業、同26年東京帝国大学医学部薬学科選科を修了し富山県尋常中学校の助教諭の職にあった。嘱託の田村輔三郎は富山県師範学校、佐多愛彦は富山病院の職員を務めていた。佐多愛彦（1871 - 1950）は鹿児島出身、明治21年県立鹿児島医学校を卒業後、東京帝国大学医学部選科に学び同3年4月同大学病理学教室助手を経て、同26年5月市立富山病院医員となった。この年「顕微鏡的研究法」なる著作を刊行。翌27年3月大阪府立医学校教諭、病理学教室主任となり同30年5月からドイツ国フライブルグ大学エルンスト・ツイグラー教授の下で研鑽をつみ同33年7月帰朝。同35年5月大阪府立医学校校長兼病院長。大正8年（1915）単科大学令による第1号として昇格した府立医科大学の学長となり、大正13年（1924）学長を辞するまでの約18年

間、病理学教室を主宰している。従って富山薬学校で佐多が実際に教鞭を執ったのは2ヵ月に満たなかったようである。

共立富山薬学校は本科、選科および速成科から成り、本科は薬剤師たるべき学力養成を主眼とし、年齢満17才以上の高等小学校卒業者または中学2年修了者を入学させ、就業年限を2ヵ年とし之を4学期に分けた。

- 第1学期：無機化学、植物学、物理学、ドイツ語
- 第2学期：有機化学、製薬化学、裁判化学、調剤学及び実地演習、分析化学（定性分析実地演習）、ドイツ語
- 第3学期：生薬学、衛生化学、裁判化学、調剤学実



共立富山薬学校敷地（明治26年現在）

地演習、定量分析実地演習

- 第4学期：衛生化学、裁判化学、日本薬局法使用法、製薬化学実地演習

選科は、年齢満17才以上にして薬学の大意を修めた者を入学させ、本科の学科目中2科目を選修させることとした。速成科は、売薬行商人に薬学の大意を識らしめるを目的とし、年齢満15才以上でほぼ算術に通曉し且つ筆記に差支なき者を入学させ、修業年限は1ヵ年とし之を4学期に分けた。

- 第1学期：無機及び有機化学、物理学、植物学
- 第2学期：生薬学、製薬化学、調剤学
- 第3学期：同上
- 第4学期：同上



記念碑「富山薬学発祥之地」

第3節 富山市立薬学校と廃校の危機

共立富山薬学校は売薬業界挙げての協力を得て明治27年2月1日に開校したものの、生徒の退学が相次ぎ、1ヵ年を二期にわけて入学生を募集しても10名に満たず、学校の維持も危ぶまれるにいたった。薬業界有志は熟議の末、市議員横江清次郎を中心に市立移管運動を展開、同30年5月富山市会は市立薬学校とすることを決議、明治30年11月1日に新生の富山市立薬学校が発足、退職した邨沢校長に代わって桜井勘六が校長兼教諭に任命された。なお、本科2年の下に新たに予科1年を設けて速成科を廃し学科レベルを中学程度に高める等、公立学校制度に準拠して諸規則が改正された。翌31年3月、薬学校運営の健全化を図るべく、市長より薬学委員が委嘱され（邨沢金広、中田太七郎、日南田宇八郎、村田

権次郎、金井久兵衛、山中半蔵、中井久次郎ら）、5月には薬学奨励委員20名を選んで委員1名につき入学生2名以上の推薦を依頼した。また、同年12月に依願退職し大阪府立医学校に転任した桜井勘六に代わって、嘱託講師であった日野五七郎が富山中学から転じて校長兼教諭に任命された。

明治32年8月12日未明、市内中野町より出火があり、折悪しく前日来の強い南風の影響で薬学校も類焼の厄をうけた。警戒に当たっていた職員生徒等の尽力で漸く書籍箱、非常持出筆筒3個、天秤、薬品器械棚一組が搬出されたものの、其の他は烏有に帰した。校舎焼失後、直ちに富山市総曲輪小学校に仮事務所を設け、9月1日より授業開始の準備にとりかかった。日野校長以下職員が市当局に交渉の結果、

横江清次郎の檀那寺であった梅沢町の円隆寺の堂宇を借り受けることができ、9月11日から辛うじて形ばかりの授業を開始した。なお、火災当日は東京帝国大学教授・長井長義および田原良純の北陸来遊を機に計画された富山県薬学大会の準備委員会が予定されていたが中止され、長井・田原両博士の来富も実現には至らなかった。

不如意な環境下で授業を続けざるを得ない日々を送るうちに、明治33年3月16日富山市議会は、その教育費査定中に「火災の善後策のため数十万円の市公債を興すにしても、就学生徒が少なく義務教育でもない薬学校の経営は勿論、校舎の新築は市の予算の及ばないところである」とし薬学校の廃校を決議した。因みに、明治32年4月の第1回卒業生は2名にすぎなかった。

地元の各新聞は廃校の否を説き、学校側は参考資料を市会議員並びに有志者に配付する一方、日野校長をはじめ職員が視学官を訪ね、現在並びに将来の薬学教育の重要性に照らし、薬学校存続の必要性を訴えた。3月19日、富山県薬剤師会は薬学校で臨時会議を開き、副会長横江清次郎を議長として日野五七郎提出の「薬学校存続動議」につき討論、建議案を市参事会、市長、市会議長に提出することを決議、福島猪太郎、高桑定太郎、島田治三郎の三氏を提出

者とし存立運動を展開した。3月21日、市内薬業者ならびに関係有志は長文の薬学校継続設置請願書を市参事会に提出、県知事を訪ねて存立の意見を述べ援助を要請した。3月23日には大菅昇平、水上嘉平ほか市内青年薬業家有志50余名が売薬青年同志会を組織して薬学校存立運動を展開、各市会議員を歴訪して廃校の不条理と復活の必要性を力説した。

3月30日の富山市会では、予算案の審議に入るやいなや横江清次郎議員は緊急動議として「薬学校費を否決するは不穏当である。本市売薬の慣習に即し業者の子弟で尋常小学校卒業くらいの者を入学させ薬学の一般を授けるとすれば、多数の生徒も得られ、実情に適している。売薬を唯一の産物とする本市の信用上薬学校存立の必要ありと信ずる。組織方法を改め、更に発案あらんことを参事会に求めたい」と述べた。議長が採否を諮ったところ、一度否決したことを数日を経ずして再議するは軽率に失するばかりか、議会決議の信用にもかかわると議論沸騰し、結局、議長は慎重に熟慮を要するとした。その後、関野議長と横江議員とが種々協議の結果、4月21日の市会において横江議員の提案通り存立が可決され、授業科目を簡略にした薬業学校（富山市立富山薬業学校）に変身することになった。

第4節 市立富山薬業学校として再建

薬剤師の養成よりは、むしろ売薬業子弟の教育に力点を置く薬業学校、富山市立富山薬業学校への転換は、明治33年（1900）5月2日県知事の認可を受けた。本校は修業年限を本科3年、別科2年とし、本科は売薬の子弟に薬学の大意を授け、別科は薬剤師試験課目の教育を目的とし本科卒業者もしくは高等小学校卒業者を入学せしめた。校長に任命された日野五七郎はその後退職して大阪府堺市の中学に転じ、後任として県立福井病院薬局長の堀大次郎が着任した。学校では毎日曜日の夜に売薬青年同志会主催の日曜懇話会が開催され、聴講者は120乃至180名

に及んだ。また、同33年12月には富山県薬剤師会は薬業学校校舎の新築を建議した。

仮住まいの校舎は、34年7月1日星井町の富山南部高等小学校の一部に移転、36年7月20日には山王町小学校跡へと移った。人事面では、堀大次郎校長は37年3月31日に退任（広島県立病院薬局長に転出）、後任に市立富山商業学校長・長野恵太が兼任、38年4月からは五番町小学校長・稲垣茂が校長心得を務めたが、一カ月後の4月29日に堤従清を迎えた。

第 5 節 市立富山薬業学校の県立移管

明治39年3月の市会で市立薬業学校の規則改正が話題になった。市参事会で審議の際、教育課程の水準を中等程度として売薬業者養成から薬剤師養成へと再転換を図り、県立移管を早急に実現するため敷地、校舎その他器械の寄付をなさんとの機運が生じた。また、業界各方面での建議、陳情もあって40年11月の富山県会に県立移管の案が上程され、12月14日の県会において40年度からの県立移管（富山県立薬業学校の発足）が決定された。

設置に関する富山県の3月28日布告では、修業年限を本科3年として薬剤事業に従事する者を養成し、予科卒業者もしくはこれと同等以上の学力あるものを入学せしめる。予科は2年とし、高等小学校2年修了者に薬学の大意を修得させ、もしくは本科に入る素養を得させることと定めた。4月1日県事務官・山村弁之助が校長事務取扱を命ぜられ25日に開校式を挙行した。同年10月26日に校長事務取扱を免ぜられた山村事務官に代わって東京大学製薬学科第4回卒（明治14年）の製薬士・中西司馬が校長兼教

諭として就任した。

41年12月3日の県会で、富山市総曲輪・日赤富山支部病院跡地に県立薬業学校の建設を可決し、県会最終日の12月14日、宇佐美勝夫知事より「富山県立薬業学校を明治43年度においてその程度を高め、専門学校令による薬学専門学校にその組織を変更せんとす」の諮問案が提出され、本案は満場一致で可決された。因みに、明治40年4月より官公立薬学専門学校卒業生は無試験で薬剤師免許状が下付されていた。

明治43年3月20日、第1回卒業式が挙行され、19名（中土庄之助、田中欣輔、改井覚太郎、田村義治、横江義清、荒木文二、田中仙三郎、浅地宗旭、吉沢初次郎、広田与七郎、浅野重作、平村貞喜、田辺精三、森田儀平、西郷清太郎、阿邊友次郎、斎藤政一、高野久平、阿部又之助）に卒業証書が授与され、ついで本科2年修了生奥野幸治外13名、同1年修了生光岡信一郎外28名、予科2年修了生山本源太郎外31名に修了証書が授与された。

第 6 節 富山県立薬学専門学校の開設と官立移管

明治42年（1909）7月文部省は、専門学校令による県立の薬学専門学校を富山市に設置し翌年4月からの開校を認可すると告示した。これを受けて富山県は県立薬業学校を43年3月末をもって廃止する旨を通達、在学中の本科生は専門学校の別科の相当する学年級に、別科生は富山中学に編入となった。43年4月1日に開校なった富山県立薬学専門学校の修学規定の主要点は、

（本科）

目 的：専門学校令の趣旨に基づく薬学教育

修業年限：3年

入学者定員：90名

入学資格者：中学卒業者

または専門学校入学者検定試験合格者

修業学科課目

倫理、ドイツ語、鉱物学、化学、薬用植

物学、生薬学、分析学、衛生化学、裁判化学、薬局方薬品鑑定、調剤学、薬化学、機械学大意、薬品工業学、体操

（別科）

目 的：薬業に従事する者に必要なる教育

修業年限：3年

入学資格者：高等小学校2カ年の課程修了者

または是と同等の学力を有する者

修業学科課目

修身及び漢文、ドイツ語、数学、歴史、地理、物理、化学、薬化学、分析学、生薬学、調剤学、博物及び生理衛生、薬局方、薬業法規、体操

校長には前身の県立薬学校に引き続き中西司馬が任命された。職員構成は、（教諭）薬学士・高畠清、（教諭囑託）日野五七郎、今野秀輔、稲田桑三

郎、高津武治、梶原高四郎、末谷三郎、(書記)石井則義であった。初の始業式は4月11日、校舎建築中のため山王町の仮校舎で挙行され、本科生31名、別科生75名を迎え入れた。なお、この年の6月に中西校長が急逝され、後任には中西校長とは東京大学同期の平山増之助薬学博士(陸軍一等薬剤正)が発令され9月4日に着任した。その後、教頭となった高嶋清は大日本製薬株式会社へ転出(44年7月)代わって同社技師長・野副豊三郎薬学士が着任、新たに新卒薬学士の内藤堯宝を教諭を迎えた。また、翌大正元年7月に新卒の薬学士藤田直市が教諭に加わった。

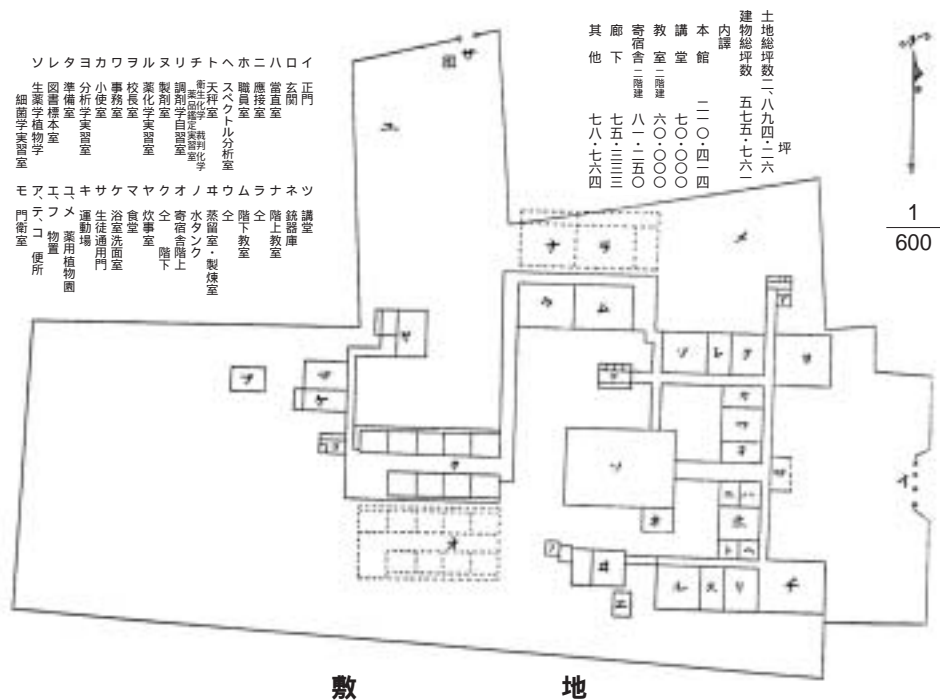
明治43年(1910)11月下旬、日赤富山支部病院跡地(富山市総曲輪389番地)に春以来建設中の校舎が竣工(敷地2892坪余、建物558坪余、工事費373千円余)12月4日に日本薬学会会頭・東京帝国大学教授・長井長義博士を迎えて開校記念式が挙行された。爾来12月4日を開校記念日とし、学校の一般公開や実験・展示等の記念行事が毎年行なわれるようになった。

大正2年4月26日、県立薬学専門学校として最初の卒業式が挙行された。翌年1月平山校長は病を得て退職、野副教頭が校長代理を務めたが、同4年9月新校長に小野瓢郎薬学博士(愛知薬学校長、愛知

県技師)が発令され10月5日に着任した。さらに、5年度には野副教頭は東京衛生試験所へ転出、後任の伊藤慎一薬学士とともに戸田貞三文学士が着任した。なお、大正6年1月の勅令・公立学校職員制公布により、教諭・助教諭をそれぞれ教授・助教授と称することとなった。

大正5年4月15、16の両日、日本薬学会の第36回総会が会頭・長井長義博士および丹波敬三博士を迎えて富山県会議事堂で開催されたが、日本薬学会の地方開催は、大阪(明治36年、第23回)九州(明治43年、第30回)に次ぐものであった。長井長義博士は、明治43年12月の県立薬学専門学校の開校記念式につぐ2度目の来富であり、かねてから富山における伝統的薬業の高度化、技術革新を期待され、県立から官立への移管、さらには薬学大学への累進に向かって努力を積み重ねるよう励まされた。

これをうけて富山県官民あげての官立移管運動が続けた結果、文部省松浦専門学務局長の下検分が大正6年8月に実現した。調査結果は、現有施設では貧弱不完全で官立移管のためには他所に移し、更に60~70万円の創立費を要することが明らかになった。日本で初めての官立薬学専門学校となれば敢えて富山とは限らず、東京・大阪あたりが適当との風聞も伝わる中、長井長義博士の強力な支援の下で富



富山県立薬学専門学校平面図 昭和43年(現在の手町・富山市民プラザ敷地)

山県・飯尾内務部長、在京中の高見之通、野村嘉六両代議士、中田清兵衛（15代）が一致協力し熱心に運動を行なった結果、土地・建物・設備等の60万円を全額寄付すれば可能との見通しが得られるに到った。井上知事は県財政の事情を訴えて交渉を重ねた結果、分担費用を47万円に減額することに成功、県参事会および富山市の了解を得て文部省と交渉した。その結果、9月の文部省議で大正8年度の官立移管が決定され、11月に閣議決定を得た。大正7年（1918）2月14日、官立移管の議案が衆議院を通過、その吉報を受けて同夜には学校側と売薬各社連携の

提灯行列が盛大に行なわれた。

因みに記録によれば、所要の創設費総額は44万2000円で、富山県が70%の30万9400円、富山市が30%の13万2600円を分担。他に上新川郡奥田村に予定された敷地1万坪の買収費、排水工事費については同じ歩合で負担することになった。その結果、富山市の負担額は14万1000円となりその半額7万500円を市内有志の特志寄付に依った。この特志寄付は8万6700円（中田清兵衛他623名）に達し予定額を超えた。

第7節 官立富山薬学専門学校の開校から終戦まで

大正9年（1920）11月26日、文部省直轄学校官制が改正され（勅令第551号）同年12月1日付で富山県立薬学専門学校の官立移管が公布され、上新川郡奥田村に創設事務所が設置された。同時に文部省令第29号で富山薬学専門学校規定が定められ、12月27日に小野瓢郎・薬学博士が校長発令された。翌10年3月、富山県告示をもって県立富山薬学専門学校は3月末限りで廃校とされ、在校生91名は官立の富山薬専へ編入となった。

官立初代の校長・小野瓢郎は就任の翌年10月19日に逝去（1867 - 1921）、高橋隆造教授が校長事務取扱を拝命、12月10日に校長発令をうけた平山松治薬学博士（大阪衛生試験所技師兼内務技師）は大正11年1月11日着任、3月23日には官立になって最初の卒業生（編入生）を送った。

校舎の新営工事は3カ年の継続事業として着手されたが、第一次世界大戦の影響下物価高騰のため工事が一年間延期となり、追加経費30万円を要した。大正10年4月には奥田の新校舎で授業が開始されたが、水道・ガスその他実習に必要な設備が整ったのは同年秋の終わりに近かった。その後、大正10年度に講堂、書庫、雨天体操場、倉庫等、12年度に第一号温室、13年度に運動場（5213坪）、14年度に製薬実習室、昭和2年度に第二号温室と薬草園敷地（10386坪）、昭和4年度に図書閲覧室（100坪）、昭和5年度に薬草園整備、薬草園管理作業室、生徒食堂、弓道場、昭和7年度に裁判化学実習室が完成、

9年度には第三階段教室などが追加整備された。昭和14年（1939）頃の記録によると、学校敷地15467坪、薬草園10408坪、合計25875坪となっている。

官立富山薬学専門学校の開校式が挙行されたのは大正11年（1922）5月10日であった。当日の主なる来賓に長井長義、丹波敬三、丹羽藤吉郎、山田薫、池口慶三、朝比奈泰彦、高橋三郎、木村彦右衛門の諸薬学博士、文部大臣代理松浦専門学務局長、柴垣文部省建築課長、千葉医学専門学校教授平野一貫、金沢医学専門学校校長高安右人、金沢高等工業学校校長青木信賢の諸氏であった。記念行事として校内の一般開放がなされ、実習室における実験、参考品の展示、さらに化粧品の販売等で賑わった。なお、開校記念日となった翌年からは音楽会、演劇、模擬店などを加えた記念祭となり、市民からは恒例行事として親しまれた。

大正14年（1925）7月25日、平山松治校長が逝去（1866 - 1925）、事務取扱を命ぜられた高橋隆造教授が12月25日に校長兼教授の発令をうけた。遡る9月9日、平山校長の嗣子平山利英より奨学資金壹千円が寄付され、その果実を以て賞牌を作り成績優良者および精勤者に授与する「平山奨学賞」が創設された。そしてこの賞は昭和26年3月卒業生まで続した。

昭和6年（1931）5月10日、開校10周年の記念式典並びに記念行事が盛大に行なわれた。翌年、高橋校長は欧米各国を学術視察、その際に収集した欧州

の売薬630余種について各教員が分担して内容解説を行ない、富山県薬剤師会の名で「欧州売薬要覧」を刊行した。

昭和12年7月7日、日支事変勃発。翌月、生徒訓育補導の任にあたる生徒主事・主事補制度が設けられ各1名の定員措置がなされた。10月13日（国民精神総動員運動の第一日目）、正門近くの校庭に据わる大鷲岩に「忠孝」に二文字が刻まれた。此の文字は広島県竹原町所在の「忠孝石」の拓本による宋の忠臣・文天祥の真蹟といわれ、岩は安政5年（1858）の大震災による大鷲山の崩壊時に流杉地区内に漂着したものと伝えられている。かかる大盤石は、昭和6/7年度卒業生の卒業記念として設置されたもので、傍らのプラタナス並木が春の訪れに若葉を輝かせ、秋風の流れにいち早く散りかかるとも、ただ黙々として朝な夕なの学徒の往来を凝視し続けていたのだった。現在、この忠孝石は新設の富山医科薬科大学薬学部正面玄関わきに、県立薬専、官立薬専の門柱とともに据えられている。

昭和14年7月から8月にかけて、興亜勤労報国隊員の生徒10名が桜井謙之介生徒主事補の引率の下、北支蒙および満州に派遣された。さらに翌年2月、戦時態勢の強化をうけて富山薬専興亜青年生徒隊が組織された。この昭和15年は紀元2600年に当たり、母校、校友会、同窓会合同の記念事業として御真影奉安殿を建設することになり、16年11月3日に落成式を行なった。

昭和16年12月8日、米英両国に宣戦布告あり、16年度卒業生は3ヵ月繰上げ卒業、17年度以降は卒業の半年繰上げが実施された。戦争が熾烈さを増すと共に学校教育は次第に歪められ、教育に関する戦時非常措置方策の閣議決定（18年10月12日）によって理工科系および教員養成諸学校学生の他は徴兵猶予を停止、学徒勤労動員を年間4ヵ月実施することになった。更に翌19年3月7日、学徒勤労動員は通年実施となり、在校生は十分に授業を受けないまま終戦時まで、主として富山化学工業株式会社、武田化学株式会社（尼崎）、三共株式会社（大阪）等の工

場に出向き、戦時下の増産活動に奉仕した。

昭和19年4月28日、高橋隆造校長（1882 - 1949）が退任、代わって徳島高等工業学校製薬化学科長の任にあった横田嘉右衛門が着任、空襲に備えて富山薬学専門学校特設防護団（横田校長団長、近藤教授副団長）が編成されたのは7月のことであった。昭和20年4月には、海軍療品廠（柳田友道少佐、萩庭丈寿中尉等40名）、陸軍衛生材料廠（渡辺恵之輔中佐、石坂哲夫少尉等）、東京帝国大学菅沢研究室の一部（大木貞雄、斉藤徳男等）が校内に疎開し、また文部省科学技術補助員養成所（男女不問、定員100名、6ヵ月修了）が校内に付設された。8月1日、学徒動員のため遅れていた20年度入学生の入学式が行なわれた。その夜、2度目の警戒警報に横田校長はじめ職員生徒が駆付けたが、2日未明に来襲した米空軍B-29爆撃機延べ174機が2時間近くにわたり照明弾41個、爆弾・焼夷弾12740個を投下、ために死者2755名、重軽傷者約8000名に達し、富山市街地の95%が焼失するという壊滅的な打撃を受けた。

被害地域の北限は奥田小学校・奥田農協倉庫に及び職員生徒一丸となった消火活動も効なく、退きの止むなきに到った。少数の軽傷者もあったが、御真影は横田校長、平田教授、梶川書記が護り、校旗は中沖教授が胴巻きにして脱出することで難を免れた。疎開中の陸軍衛生材料廠員石坂少尉は消火活動中脚部に焼夷弾の直撃を受けたが、横田学長が着用の巻ゲートルを外して応急の止血手当をして事無きを得たという。校舎は赤煉瓦の薬品庫と書庫を除き焼失したが、新保、柿沢、音杉などの役場や学校に疎開させていた重要図書、顕微鏡、天秤、机、戸棚、器具等は難を免れた。とりわけ、南加積小学校に疎開のバックナンバーを主とする学術誌は、10月に富山市新庄町の金岡邸に運ばれ、翌年4月から市内荒川の帝国化成株式会社（現テイカ製薬の前身）工場内に移して県内製薬企業一般の閲覧に便宜を図ることができた。

第2章 黎明期

第1節 富山薬専校舎の戦災復興

昭和18年、日米戦局は日本の敗色愈々濃厚となり学徒動員を余儀なくされた。19年末になると本土空襲が始まった。そして遂に富山も、昭和20年8月1日から2日の未明にかけて大空襲をうけ、富山薬専に難を逃れて疎開していた海軍療品廠や陸軍材料廠も、薬専の校舎もろとも一夜にして灰燼に帰した。そして広島、長崎に原爆が投下されて日米の戦いは終わった。日本国民は等しく虚脱状態に陥り、そこから這い上がるには長い年月を要したのである。このようなわけで、薬専校舎の復旧もどうするか、そして在学生の教育を如何に進めるかは焦眉の急であり、9月から旧制富山高校の一部を借り受け授業が再開され、一年次と二年次の学生が一先ず授業を受けることとなった。

年が明けて昭和21年2月16日、電気ビルにおいて富山薬学専門学校復興期成同盟会が結成され、三百萬円の復興資金を目標として活動が開始された。当時、復興にむけての教官各位の情熱はいうまでもなく、学生諸君まで富山駅前で復興学生喫茶店を開設し利益を寄付するなど、それぞれの立場で涙ぐましい努力を重ねた。横田校長は陸軍二等兵の軍服を身に軍靴を履き、リュックサックに2～3合の米と旅館で暖をとるための木炭数片を入れて全国の薬系企業へ浄財を求めて廻った。横田校長は、これを当時信濃町第二小学校の2階にあった大蔵省の分室に赴き報告したところ、このような浄財は非課税の特例処置を採ろうということになり、国立学校校舎の復興第一号になったとのことである。

募金は二期に亘り、凡計400萬円で、その中には富山化学工業(株)社長・中井敏雄氏(富山薬専10回卒)などは私費四十萬円を投じ一棟を先ず建てて下され、それによって早くも昭和22年春には奥田の新校舎に復帰した。当時は、戦災による再建家屋の

費用は、甲号住宅とか乙号住宅などというのがあって、10～15坪位のプレハブで1500円～2000円位で建てられたのであった。中井氏の寄付による一棟は中井記念館とされ、実習室、集会室兼講義室、校長室、研究室一室を含むもので、まことに巨額の寄付であった。このような次第で、文部省としても復旧費を支出し、廃校の噂も消えて、実際には、昭和22年4月15日奥田に復帰したときは別に実習室二棟も竣工していた。

ところで、最後の薬専ということでもう一つ記しておきたいことがある。第3節においても関連した事項が記されるが、何と云っても、終戦後教育の民主化、機会均等の名の下で男女共学制が導入された。そしてまた、入学試験制度の改善策の一つとして、昭和23年入学生から全国統一の進学適性検査も実施され、各学校が独自で実施する学説試験をも加味して適正に実施されたいとのことで、本校でも男女共学制をとることになり、高等女学校卒業生も受験できるようになった。文部省からの通達では、学校独自の学説試験と進学適性検査の評価は等価にせよとのことだったが、等価とはイコールか、それとも、当価(equivalent)かの議論もあったが、結局、当校の場合はイコールの60点、合計120点だった。なお、進学適性検査の結果についてその実施機関から、例えば「貴方は 点で、文化系、理科系のいずれに進学するも可なり」などと、親切な進路のコメントまで付して、今でいう情報開示がなされたという。

戦後、最初で最後の男女共学制導入の官立専門学校ということでも、かなりの女子学生が受験し、当時の新聞には「五嬢が初のパス、富山薬専校」とか「本県初の女性専門学校生徒の栄を担う」などと大仰な扱いであった。学校側でも、初の女子学生受入

となると種々の配慮が必要で、事は制服・制帽までにおよび、左横に房のついた角帽は街の話題を呼んだ。その他、その頃を懐かしむ事柄は数多くあり、薬用植物園にあった「キササゲ」の森で収穫した生薬材料の売上金を国庫に納入したことなど、当時の卒業生の語り草の一つになっている。



富山薬専女子学生の角帽

第2節 薬学専門学校から大学への転換

戦後初の富山薬専卒業生は昭和20年9月に送りだされ、次いで22年3月卒業となったが、丁度その頃から、戦後日本の教育の民主化と機会均等など、社会のありとあらゆる面で大改革が行なわれつつあった。なんといっても、世界的に観て日本の国体や社会の特殊性あるいは非民主制は誰の目にも明らかだったからである。公教育においても、六三三制という、いわば従来のような複線的な教育路線ではなく、小中高の六三三制という単純路線とし、専門学校や高等学校およびその他一部の特殊学校を除いて大学一本に絞り、一部二年制の短期大学を認めた形で抜本的教育改革が推進されることとなった。このような話は一体どこから出てきたのか、当時は駆け出しの駆け出しだった筆者（山崎）には良く分からなかった。会議の席上では、事あるごとに教育制度改革計画の進捗状況が報告されたが、大学になるところはなればよく、自分達のところは専門学校のまま認めて貰ってよいではないかと思った。というのも、大学薬学部に変身するには教官のうち学位取得者が四名以上必要という条件は、早急に満たされるような状態ではなかったからである。それともう一つ、これは、薬学部の場合あとあとまで尾を引くことになった難しい問題があった。というのは、戦前は、今日のような給与法が整備されていたわけではなく、例えば、富山薬専の場合なら修業3年間の総学生定員240名ならば凡そ教員・事務職員計何名、人件費は年間これこれ等という調子の全くの当てがい扶持だったのである。事実筆者が21年2月富山薬専

に奉職した時の給与は月額95円であった。それでも基準より5円高いので理解してくれとの由、当時既に煙草のピースは一箱7円、コロナは10円位であった。そんなことよりも、当時の富山薬専では人件費不足で教職員を新規に採用することができず、やっとなのおもいで私一人を横田校長が雇ってくれたのである。長期の戦争期間中人事刷新が糞詰まり状態で、若い人を採用するどころか、校長以上の高齢教官は四人もおられた。而も困ったことに、新制大学の教官定員については現員をもって定員とすると云う、極めて過酷な条件であった。ただ、富山大学の場合も他大学同様、一般教育担当教官のみは旧高等専門学校から文理学部に移行されることとなり、その分だけは文部省として専門教官で埋めることが許された。つまり、一般教育担当教官分だけ文部省は定員増を認めたことになり、薬学部の場合は英語の中塩、独語の平田、倫理の杉本の3教官が文理学部に行かれ、これら3人の空席は志甫伝逸氏、金岡好造氏と、後に来学の三ツ野問治氏、長谷純一氏をもって埋めることで文部省へ申請された（実際には金岡氏の着任はなかった）。この申請によって、教授7人中4名が博士号取得者として文部省審査を通過し、薬学部設置が認可された。

このようなわけで、発足当初は助教授7名、助手4名を加えて教官総数18名という悲惨な状態で、実験実習指導の臨時筆生の方が後で3人位いた程度であり、学士様を送りだすには余りにもお粗末であった。教官の年齢構成と人事の停滞がもたらした悲劇

であった。

因みに昭和26、27年頃の教官は、横田嘉右衛門、中沖太七郎、三橋監物、志甫伝逸、倉田軍一、桜井謙之介、志甫徳次郎、野島俊二郎、飯田武夫、長谷純一、三ッ野問治、松本弘一、北川晴雄、山崎高應であり、助手は大浦彦吉、高島正市、玉村貞夫の三氏であったが、山崎、大浦、玉村を除いて全員が他界されている。

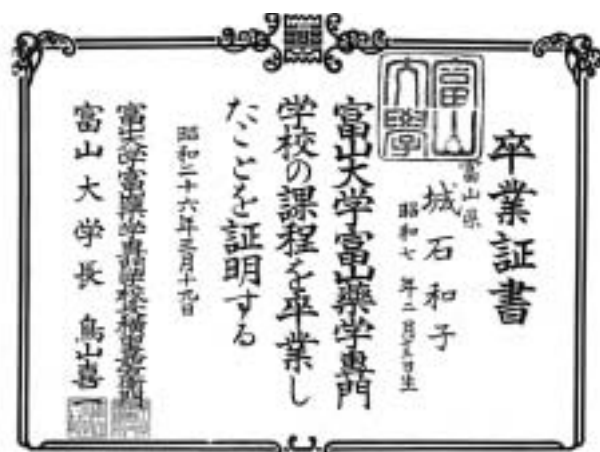
薬学部が如何に教官定員不足であったかは、他大学薬学部と比較すると明白である。他大学の薬学部

は熊本大学を除いて、どれも学生定員は40名、しかも、助手等は所属医科大学から借りていた定員であったが、大学発足時には現員をもって定員とするという法令によって母体医学部に返さなくて済んだのである。こんなわけで、今考えてみると随分無理をして大学作りが行なわれただけでなく、このような少数の教員が良く一致団結して、しかも実験実習は40名ずつ二クラス編成で、同一実習を二回繰り返すなど、今の実験の2倍以上の時間をかけたものであった。

第3節 大学移管に伴う専門学校存続の経過措置

前節で触れられたように、高等専門学校が一挙に大学に転換することによって、在学生に対する経過措置をとることとなった。既に旧制中学校では昭和22年頃、新制高校二年生が誕生し、しかも旧制中学は23年3月まで存続していた。旧制高等学校は25年3月まで存続したが23年度入学者は一年間在籍後、新制大学受験ということになった。そして、旧制専門学校は26年3月まで存続、従って23年3月まで存続した中学校から専門学校に入学した者は26年3月卒業、旧制高校へ入学した者は前述の如く改めて大学受験、また、専門学校に入った者も一年後改めて大学に入った者もある。誠に複雑な措置で、その上、24年4月に大学転換と同時に専門学校は大学に包含される専門学校として位置づけされ、富山薬専の場合は「富山大学富山薬学専門学校」とされた。従っ

て、25年3月および26年3月卒業生の卒業証書は、次の例のように富山大学富山薬学専門学校の名で交付されるという、珍しい証書になったのである。

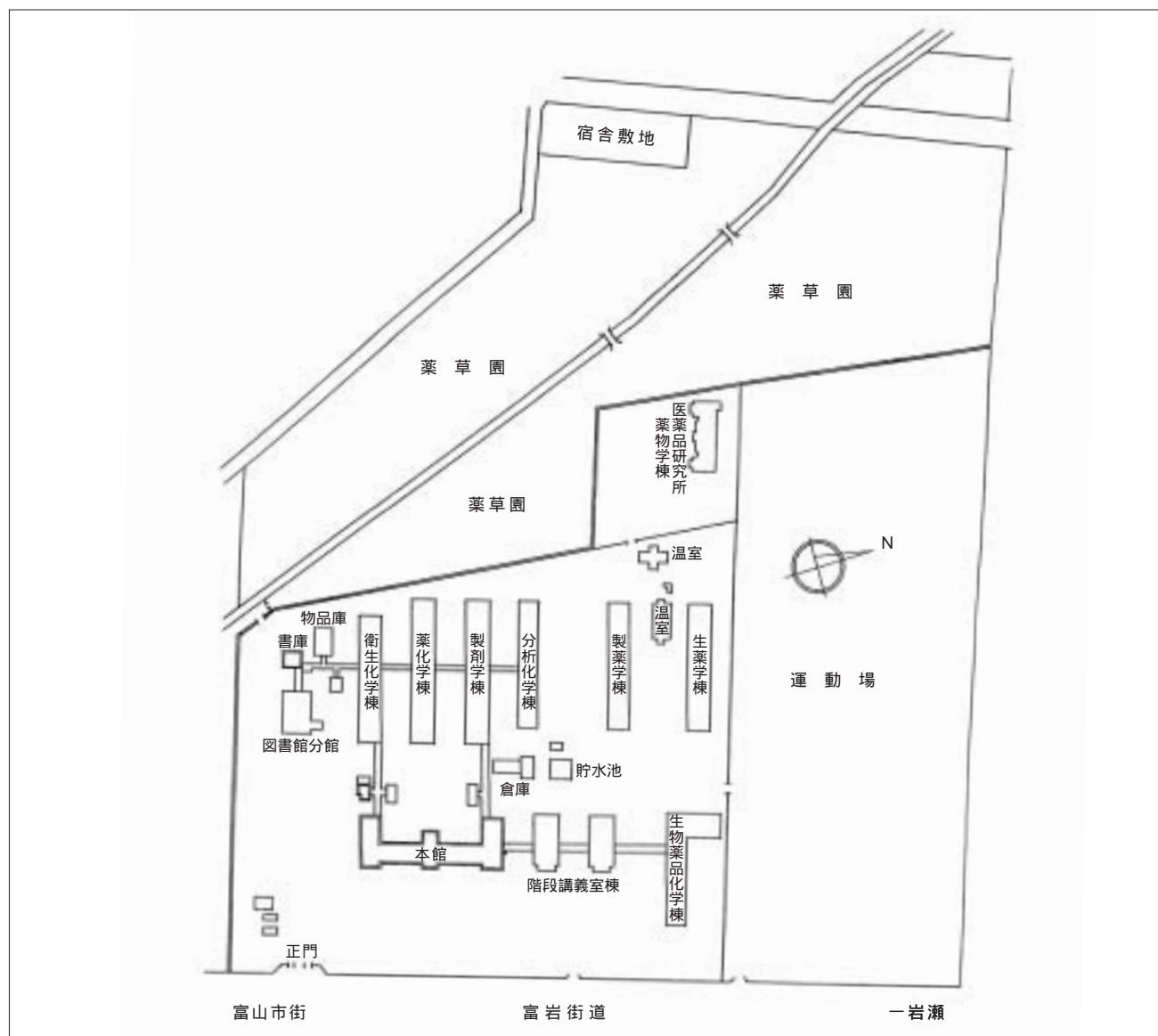


薬専最後の卒業証書

第3章 薬学部の整備・充実(奥田キャンパス時代)

薬学部の前身である富山薬学専門学校のカンパスは大正10年以来富山市奥田に所在、20年8月1日の米軍大空襲によって壊滅的な被害を受けたが、その後の輝かしい戦災復興ぶりは前章において詳述されているところである。昭和23年度までに、本館、階段講義室2棟、および3棟の実習・研究室(衛生化学、薬化学、薬剤学)が竣工、新校舎で学んだ富山薬専最後の卒業生を見送ったのは26年3月19日であった。その後、富山大学が発足した24年度には薬

品分析化学棟および図書館閲覧・事務室、翌年度には製薬学棟および生薬学棟、27年度には生物薬品化学棟、医薬資源研究所(薬物学教室)および大温室が竣工し、当初予定の施設整備がほぼ終了、以下の配置見取図のように大学キャンパスらしい姿になった。なお、キャンパス正面の本館2階には富山大学本部事務局が入居、33年9月五福地区に新本部庁舎が竣工・移転するまで続いた。



薬学部・奥田キャンパス見取図(昭和27年)

第 1 節 学部教育課程の変遷

(1) 薬学部薬学科

薬学部初の入学生（入学定員80名）を迎えた入学式は昭和24年7月15日に行なわれた。最初の一年半は他学部学生と同様、文理学部（蓮町の旧制富山高等学校跡）において一般教育科目・外国語・体育を履修することになった。学則（25.1.20制定、24.

5.31より施行）に在学中履修すべき学科課程が定められ、薬学部薬学科・専門課程の講座（学科目担当）、学科目および履修単位（必修）は表3・1のとおりとされた。が、その後暫くは毎年のように履修規定の改正が行なわれた。

表3・1 専門課程授業科目および履修単位

(25.1.20制定)

| 講 座 | 担当学科目 | 単位数 | 講 座 | 担当学科目 | 単位数 |
|-------------|-----------|-----|-------------|---------------|-----|
| 薬 化 学 | 理 論 化 学 | 2 | 衛 生 化 学 | 衛 生 化 学 | 3 |
| | 無 機 化 学 | 3 | | 鑑 識 化 学 | 1 |
| | 有 機 化 学 | 3 | | 公 衆 衛 生 | 3 |
| | 実 習 | 4 | | 実 習 | 2 |
| 薬 品 分 析 化 学 | 分 析 化 学 | 3 | 薬 剤 学 | 調 剤 学 | 2 |
| | 特 殊 分 析 | 2 | | 製 剤 学 | 2 |
| | 実 習 | 4 | | 薬 局 方 | 2 |
| | | | | 実 習 | 3 |
| 生 薬 学 | 薬 用 植 物 学 | 2 | 生 物 薬 品 化 学 | 生 物 薬 品 化 学 | 2 |
| | 生 薬 学 | 4 | | 生 化 学 | 2 |
| | 実 習 | 3 | | 微 生 物 及 び 免 疫 | 2 |
| | | | | 実 習 | 3 |
| 製 薬 学 | 製 薬 学 | 5 | 講 座 外 | 基 礎 医 学 | 2 |
| | 機 械 工 学 | 2 | | 薬 物 学 | 3 |
| | 実 習 | 3 | | 薬 制 ・ 経 営 論 | 1 |
| 講 座 共 通 | 特 別 研 究 | 10 | 合 計 単 位 | | 144 |

27年度には北川晴雄助教授（薬物学）が着任し、講座外学科目だった薬物学と基礎医学が薬物学講座担当授業科目となり、併せて生物検定法が加えられた。また、講座外学科目に「薬学図書」が設けられ図書分館長の村上清造助教授が担当した。本格的な専門家による薬学文献調査法の講義は全国薬系大学から垂涎的とされ、富山の卒業生は文献調査に強いとの評判が定着した。

さらに進んで、36年度には製薬学が製薬学第一と第二に発展的に分割され教育研究組織の充実が図られたのであるが、2学科（薬学科、製薬化学科）の設置を念頭においた措置でもあった。製薬化学科の増設は、薬学卒業生に対する社会的要請、すなわち

製薬技術・研究者の養成にも力を入れるべきとの要望に応えるべく計画されたもので、文部省に予算要求をつづけたが容易に実現するような環境にはなかった。そこで、実績づくりに乗り出そうと、薬学部規定の改正によって2コース制（薬学と製薬）を設定した。昭和37年度2年次学生から適用された新カリキュラムは表3・2に示すとおりで、基礎学科目（薬化学、分析化学）の履修単位はほぼ共通しているが、薬学コースは薬剤師職能教育に重点をおき、製薬コースでは物理化学および製造化学・製造工学を重視、かつ大幅に選択科目を設け薬剤師としての資質に欠けることのないよう工夫されたものである。

表3・2 2コース制授業科目・単位数(昭和37年4月実施)

(1) 一般教育科目・外国語科目・保健体育科目

| 科目区分 | 系列 | 必修単位数(合計63単位以上) | |
|--------|---------|-----------------|---------------|
| 一般教育科目 | 人文学系列 | 3科目12単位以上 | |
| | 社会科学系列 | 3科目12単位以上 | |
| | 自然科学系列 | 数 学 | 4単位 |
| | | 物 理 学 | 5単位(実験1単位を含む) |
| | | 化 学 | 5単位(実験1単位を含む) |
| 生 物 学 | | 5単位(実験1単位を含む) | |
| 外国語科目 | 英語、ドイツ語 | 16単位以上(各8単位以上) | |
| 保健体育科目 | 講義、実技 | 4単位以上(各2単位以上) | |

(2) 専門必修科目

| 薬学コース | | | 製薬コース | | |
|-------------------|------|-----|-------------------|------|-----|
| 学 科 目 | 単位数 | | 学 科 目 | 単位数 | |
| | 講義 | 実習 | | 講義 | 実習 |
| 薬 化 学 | 5.5 | 1.5 | 薬 化 学 | 5.5 | 1.5 |
| 物 理 化 学 | 1.5 | | 薬 品 物 理 化 学 | 3.5 | 1.5 |
| 分 析 化 学 | 5.0 | 2.0 | 分 析 化 学 | 6.0 | 2.0 |
| 生 化 学 | 6.0 | 1.5 | 生 化 学 概 論 | 4.5 | 0.5 |
| 生 薬 学 | 5.0 | 1.5 | 生 薬 学 概 論 | 3.0 | 0.5 |
| 薬 物 学 | 5.0 | 1.5 | 薬 物 学 概 論 | 3.0 | 0.5 |
| 薬 品 化 学 | 6.0 | 1.0 | 合 成 薬 品 製 造 学 | 7.5 | 2.0 |
| 薬 剤 学 | 4.0 | 2.0 | 天 然 物 薬 品 製 造 化 学 | 6.5 | 2.0 |
| 衛 生 化 学 | 6.0 | 2.0 | 薬 剤 製 造 工 学 | 3.0 | 2.0 |
| 微 生 物 学 | 2.0 | | 薬 品 製 造 工 学 | 3.0 | 1.5 |
| 病 原 微 生 物 学 | 1.0 | 1.0 | 局 方 概 論 | 1.5 | |
| 病 理 学 | 2.0 | | 放 射 化 学・放 射 保 健 学 | 1.5 | 0.5 |
| 解 剖 生 理 学 | 4.0 | 0.5 | 特 別 研 究 | 6.0 | |
| 局 方 概 論 | 1.5 | | 履 修 合 計 単 位 | 69.0 | |
| 薬 事 衛 生 法 規 | 1.0 | | | | |
| 放 射 化 学・放 射 保 健 学 | 1.5 | 0.5 | | | |
| 特 別 研 究 | 6.0 | | | | |
| 履 修 合 計 単 位 | 78.0 | | | | |

(3) 専門選択科目

| 薬学コース(計20.0単位) | | 製薬コース(計28.0単位) | | | |
|----------------|-----|----------------|-----|-------------|-----|
| 学科目 | 単位 | 学科目 | 単位 | 学科目 | 単位 |
| 農 薬 学 | 2.0 | 薬 剤 学 概 論 | 2.0 | 化 学 工 業 経 済 | 1.0 |
| 薬 品 製 造 学 | 3.0 | 同 上 実 習 | 1.0 | 工 場 衛 生 学 | 1.0 |
| 推 計 学 | 1.5 | 衛 生 化 学 概 論 | 2.0 | 薬 学 史 | 1.0 |
| 薬 局 管 理 学 | 2.0 | 微 生 物 学 | 2.0 | 農 薬 学 | 2.0 |
| 薬 品 衛 生 材 料 学 | 1.0 | 薬 化 学 概 論 | 2.0 | 香 粧 品 化 学 | 1.0 |
| 薬 剤 製 造 学 | 1.0 | 推 計 学 | 1.5 | | |
| 香 粧 品 化 学 | 1.0 | 品 質 管 理 | 1.0 | | |
| 薬 業 経 済 | 1.0 | 生 薬 化 学 | 2.0 | | |
| 薬 学 文 献 学 | 1.0 | 薬 品 化 学 実 習 | 1.0 | | |
| 臨 床 医 学 概 論 | 1.0 | 薬 事 衛 生 法 規 | 1.0 | | |
| 薬 学 史 | 1.0 | 特 許 法 | 0.5 | | |
| 薬 化 学 概 論 | 2.0 | 応 用 物 理 学 | 1.0 | | |
| 特 許 法 | 0.5 | 薬 学 文 献 学 | 1.0 | | |
| 品 質 管 理 | 1.0 | 病 理 学 | 2.0 | | |
| 工 場 衛 生 学 | 1.0 | 電 気 工 学 | 2.0 | | |

選択科目の履修要件

薬学コース：10単位以上（農薬学2単位を含む）

製薬コース：15単位以上（薬剤学概論2単位、同実習1単位、衛生化学概論2単位、微生物学2単位を含む）

以上の薬学・製薬2コース制カリキュラムも、次章で述べる大学院薬学研究科の発足(昭和38年4月)に伴う講座増をうけて大改正された。五福キャンパス移転後に実施されたのであるが、新旧対比の意味においてその内容に触れることにする。

昭和39年10月1日より適用(40年1月22日施行)されたカリキュラム編成(表3・3)は講座制(12

講座)の原則を取入れたものであって、(1)必修科目に講座担当の講義・実習、および薬学固有の関連基礎科目を配し、(2)選択科目のメニューを職能に関係する授業科目とし単位取得に条件を付け安易な履修に歯止めをかけた。なお、一般教育等科目等については諸般の事情により従前どおり(前ページ表3・2-1)とした。

(2) 薬学専攻科

各学部に専攻科を置き修業年限を一年以上とすることは学則に定められていたが、学部規定の一部改正がなされ薬学専攻科が発足したのは昭和30年7月であった。同科課程のカリキュラムは、特論等の講義(15科目各2~4単位)よおよび8科目各20単位の実習(薬化学、特殊分析、生薬・生薬化学、薬品製造学、公衆衛生・衛生化学、薬剤学、生理化学、

薬物学)からなり、履修単位は講義3科目10単位以上、実習20単位(研究報告を含む)とされた。入学者は初年度が男子1名、31年度は男子3名、女子1名、32年度は女子2名、33~35年度は各男子1名、37年度は男子3名の計14名であったが、大学院薬学研究科の設置(38年4月)により専攻科は廃止された。

表3・3 2コース制授業科目・履修単位

(1) 専門必修科目

(昭和39年10月1日適用)

| 担当講座 | 主要専門科目 | 薬学コース | | 製薬コース | | 担当講座 | 主要専門科目 | 薬学コース | | 製薬コース | |
|--------|--------|-------|-------|-------|-----|---------|-----------|--------------|-----|-------|---|
| | | | | | | | | | | | |
| 薬化学 | 無機化学 | 1 | 8 | 1 | 8 | 薬剤製造学 | 薬剤製造学 | | | 1.5 | 6 |
| | 有機化学 | 5 | | 5 | | | 薬剤製造学 | | | 3 | |
| | 実習 | 2 | | 2 | | | 実習 | | | 1.5 | |
| 薬品分析化学 | 分析化学 | 3 | 7.5 | 3 | 7.5 | 薬品生物化学 | 薬品生物化学 | 4 | 6.5 | 4 | 4 |
| | 物理分析化学 | 2 | | 2 | | | 薬品生物化学 | 1 | | | |
| | 実習 | 2.5 | | 2.5 | | | 実習 | 1.5 | | | |
| 生薬学 | 薬用植物学 | 1 | 6.5 | | | 薬品作用学 | 薬品作用学 | 3 | 6.5 | 3 | 3 |
| | 生薬学 | 1.5 | | | | | 薬品作用学 | 2 | | | |
| | 生薬化学 | 2.5 | | | | | 実習 | 1.5 | | | |
| | 実習 | 1.5 | | | | 生物薬品製造学 | 生物薬品製造学 | | | 2 | |
| 薬品物理化学 | 物理化学 | 3 | 3 | 1.5 | 6 | | 微生物薬品製造学 | | | 2 | 5 |
| | 物理化学 | | | | | | 1.5 | 実習 | | | |
| | 実習 | | | | | 1.5 | 薬品製造工学 | 薬品製造工学 | 2 | 3 | |
| 薬品合成化学 | 薬品合成化学 | | | 1 | 7.5 | 特別研究 | | 実習 | 1 | | |
| | 薬品合成化学 | | | 3 | | | 解剖生理学 | 1.5 | | | |
| | 薬品合成化学 | | | 2 | | 病原微生物学 | | 2.5 (0.5) | | 1 | |
| | 実習 | | | 1.5 | | 関連科目 | 放射化学・放射線保 | 2 (0.5) | | | |
| 衛生化学 | 衛生化学 | 2.5 | 7 | | | | 健学 | 2 | | | |
| | 公衆衛生 | 2 | | | | | 病理学 | | | 2 | |
| | 裁判化学 | 1 | | | | | 応用数学 | | | 3 | |
| | 実習 | 1.5 | | | | 薬剤学 | 薬剤学 | 3 | 5.5 | | |
| 薬剤学 | 薬剤学 | 1 | 薬局方概論 | 1 | | | | | | | |
| | 実習 | 1.5 | 薬品試験法 | 1 | | | | | | | |

(2) 専門選択科目単位数

| 授業科目 | 薬学コース | 製薬コース | 授業科目 | 薬学コース | 製薬コース |
|-------------|-------|-------|-------------|-------|-------|
| 機 器 分 析 | 1 | 1 | 臨 床 医 学 総 論 | 1 | |
| 推 計 学 | 1.5 | 1.5 | 応 用 数 学 | 2 | |
| 有 機 化 学 外 論 | 1 | 1 | 応 用 物 理 学 | 2 | |
| 工 場 衛 生 | 0.5 | 0.5 | 薬 剤 製 造 学 | 1.5 | |
| 品 質 管 理 | 1 | 1 | 薬 業 経 済 | 1 | |
| 薬 学 文 献 学 | 1 | 1 | 生 薬 学 概 論 | | 1 |
| 薬 学 史 | 1 | 1 | 生 薬 化 学 | | 2.5 |
| 特 許 法 | 0.5 | 0.5 | 衛 生 化 学 概 論 | | 3 |
| 化 学 療 法 剤 | 0.5 | 0.5 | 薬 剤 学 | | 3 |
| 細 胞 化 学 | 1 | 1 | 薬 剤 学 実 習 | | 1 |
| 病 態 生 化 学 | 1 | | 薬 品 試 験 法 | | 1 |
| 抗 生 物 質 学 | 1 | | 薬 品 作 用 学 | | 2 |
| 薬 品 合 成 化 学 | 3 | | 電 気 機 器 | | 1 |
| 食 品 衛 生 | 0.5 | | 化 学 工 業 経 済 | | 1 |
| 薬 局 管 理 論 | 1 | | 薬 事 衛 生 法 規 | | 1 |

選択科目の履修要件

薬学コース： 印の必修選択科目（計5.5単位）を含め16.5単位以上。

製薬コース： 薬剤師国家試験を受験しようとする者は、 印の必修選択科目（計12.5単位）を含め19.0単位以上。

第 2 節 入学者選抜学力検査教科・科目の変遷

昭和24年初年度の入学者選抜学力検査は全学部統一の5教科（国語、社会、数学、理科、外国語）とし国語以外の教科は1科目選択で行なわれた。ついで第1回生が卒業した28年度には社会、数学、理科が各2科目と大々的に変更されたが、志願者が激減（薬学部で約3倍）したこともあってか1年限り、翌29年度には2科目は理科だけとされ、さらに30年には全学的に4教科になった。薬学部では社会を外し、理科（物理、化学、生物、地学）を1科目選択としたところ志願者数が13倍、31年度は史上最高の16倍を記録、激戦を勝ち抜いてきただけあって優秀な学生が多かった、とその後の語り草にもなった。32年度には全学的に5教科に復し薬学部も社会1科目を復活させたが、新たに数学3科目（解析、解析、幾何）を課すとともに、理科から地学を外し

「物理・化学・生物のうち1科目選択が望ましい」との条件が付けられた。その後、高校教育課程の改訂をうけて数学教科の科目数や出題範囲の手直しがなされる一方、薬学・製薬2コース制実施（37年）以降、理科教科の学力検査科目の見直しが真剣に討議されてきた。その結果、39年度入試では「物理・化学・生物のうち化学を含めて2科目」とされ、2学科制（薬学、製薬化学）の発足した42年度からは両学科同一の2科目「物理と化学」が指定された。さらに進んで46年度では、化学と物理または化学と生物に変更されたが1年限りで、47年度からは薬学科が化学と生物、製薬化学科が化学と物理で行なわれた。なお、薬学部学生募集の最終年度となった49年度の理科の選択条件は46年度と同一であった。

第3節 教育研究附属施設

(1) 附属図書館薬学部分館

富山大学が発足し奥田キャンパスに附属図書館薬学部分館が設けられたが、その基礎になったのは富山大空襲の戦火を免れた2階建土蔵造りの書庫(132平米)であった。築造(大正10年11月)から20年余り経過していたが脅威的な耐火性を発揮、それまで営々と蓄積してきた豊富かつ貴重な学術雑誌等の書籍を守りえたことは誠に幸運ではあったが、事務室備付けの図書台帳・カードが全て焼失しそれらの再整備に図書課職員が大変苦労した。

昭和25年2月に分館事務室・閲覧室(計62.5坪)が付設され、初代分館長に任ぜられた村上清造・文部事務官(大正11年富山薬専卒、昭和31年助教授)によって蔵書の合理的な分類整理が成され、「薬学図書」なる講義を担当する一方、文献検索の個別指



附属図書館薬学部分館(右端書庫)

(2) 附属薬用植物園

富山大学薬学部附属となった薬用植物園(薬草園)の歴史は古く、1910年富山県立薬学専門学校時代にその総曲輪校舎敷地内に設けられた標本園(千余坪)に遡る。1915年当時の栽培植物目録によれば、すでに約170種におよぶ薬用植物の育成・育種がなされており、富山県家庭薬業界の薬草栽培の指導にあたった。官立専門学校に移管されて3年後の1932年、薬草園は富山市牛島の神通川廃川地に移転され約一万坪に拡大されたが、間もなく都市計画事業の該当地になったことから奥田校舎に隣接する敷地(一万386坪)に移ることになった。1927年から始まった新薬草園の本格的施設整備に事務部門の薬園課があ

導(レファレンスサービス)や対外啓蒙活動にも尽力した。なお、村上は、薬学文献利用法の研究と普及活動により昭和31年富山県文化賞、38年には日本図書館協会NDC賞ならびに日本薬学会教育賞を受賞した。

薬学部分館は、約12,000冊の蔵書(主に薬学専門図書)をもって出発したが、それ以前およびその後の図書充実に地元製薬関連企業の多大な貢献があった。昭和15年に富山化学工業・北川承三専務が中心となって「図書館後援会」が結成され、定期的に図書の寄贈がなされた。その後昭和20年に「図書館利用者会」と名称変更し団体会員の増強が図られ、36年までに約270万円相当の図書、主として学術雑誌のバックナンバーが寄付され、会員のみならず他学部の教官・学生にも広く利用されてきた。昭和37年になって発展的に組織改正が行なわれ、役員構成を学内外とする「図書館後援会」が誕生、機関誌「文献情報」(季刊)を発行して学内外の啓蒙活動にも取り組んだ。五福キャンパス移転後の45年に「富山大学薬学部文献研究会」と名称変更したが、その名の示すとおり、大学側が最新の学術文献情報の提供と解説を受け持ったのである。正に学術情報を通じての産学共同であり、医薬大移行後も図書寄付行為は続けられた。

たり、大温室をはじめ管理棟、乾燥収納棟、堆肥舎等の建設、圃場整備が順調に進められた。完成した新薬草園は標本園、実験園、経済園および圃園に区分され、それらの内容と規模は他に類例を見ないのであった。しかし、第二次世界大戦末期には食料増産の国策に沿って農地に転用され、薬草園の姿は一変した。1945年の戦火によって薬草園の諸施設も失われたが、富山大学移管後は復興計画にしたがって大温室の復元、管理棟等の建設がなされ、薬草や薬木の収集・栽培・供給も順調に進められた。

そして、昭和28年(1953)からはウイキョウ、キササゲ、カノコソウなどの生薬製剤原料も供給でき

るようになった。

なお、当時の薬用植物園の維持・管理は生薬学教

(3) 医薬資源研究所

薬草園の一角に昭和27年度姿を現した医薬資源研究所（238m²、8研究室）は、富山大学設置期成同盟会の寄付によって設置されたもので、和漢薬研究の情報発信基地として関係学会ならびに業界の期待を集めた。同年東大より赴任した北川晴雄助教授の

(4) 放射性同位元素研究室

薬学研究におけるラジオ・アイソトープの利用が急速に進歩するにつれ、学部教育においても講義実習（放射線化学・放射保健学）の実施が不可避になると予想、当局に施設の新営を求めてきた。全国薬学部のトップを切って予算化されたのが昭和30年



薬草園から眺めた医薬資源研究所

室（中沖太七郎教授）が担当し、常時3名程度の職員が維持管理等の実務作業にあたった。

薬物学教室が一部を使用した他は、薬用資源開発の研究従事者に開放され、地元家庭薬産業との共同研究も頻繁に行なわれ多くの貴重な成果をあげることができた。

で、衛生化学棟西端部を割愛して研究室（82m²）が用意された。昭和34年には実験室、測定室、管理室等の間仕切り工事が完了、学生実習が支障なく行なわれるようになった。



放射性同位元素研究室

第4節 教育研究組織と研究活動

大学発足当初の学科目（講座）担当教員は、薬化学（三橋監物教授、山崎高應助教授）、薬品分析化学（志甫伝逸教授、志甫徳次郎助教授）、生薬学（中沖太七郎教授）、製薬学（横田嘉右衛門教授、薬学部長併任）、衛生化学（倉田軍一助教授）、薬剤学（櫻井謙之介助教授）、生物薬品化学（長谷純一教授）で、一部の教員は昭和27年3月まで存続した富山薬専の併任を務めた。その後、学年進行に伴って教員組織が整備充実されており、昭和39年9月までの期間、任に在った教官の氏名・官職は次の表3・4のとおりである。

また、その間の研究活動の流れは、次章(表4・4)に掲げる文部省科学研究費交付一覧(昭和24年度以降)によって知ることができるが、各講座が主力とした研究課題を端的に表現すると次のようであった。

(薬化学)

含窒素異項環化合物の薬化学的研究

(薬品分析化学)

異項環化合物の合成と反応機構の研究

(生薬学)

フラボンを中心とする植物成分および動物生薬成分の研究

(製薬学第一)

アザベンゾキノリチン類の合成研究

(製薬学第二)

NTU頁岩油成分の研究

(衛生化学)

キチン及びグルコサミンの衛生化学的研究

(薬剤学)

医薬品製剤の防黴研究

(生物薬品化学)

キノン類の生理活性、酵素阻害剤の研究

(薬物学)

クマリン誘導体の薬品的研究

以上の研究を実施するに当たって必要とした特別経費は、文部省科学研究費、富山県ならびに地元を中心とする製薬関係企業から寄せられた研究助成金(詳細は薬学部創立75周年記念誌)から支弁されたもので、第一期黄金時代と誇りうるような研究業績を内外に示し、次ぎなる飛躍に繋げることができた。

表3・4 教職員組織(昭和24年5月~37年9月)

| 講座等 | 教授 | 助教授・講師 | 助手・技官 |
|-----------|-----------------|-------------------------|----------------------------|
| 薬化学 | 三橋 鑿物 | 山崎 高應 野村 敬一 | 野村 哲男 大浦 彦吉 永田 正典 塩谷 俊作 |
| 薬品分析化学 | 志甫 伝逸 | 志甫徳次郎 高林 昇 | 高嶋 正市 高林 昇 金岡 又雄 田上昇一郎 |
| 生薬学 | 中沖太七郎 三ツ野門治 | 三ツ野門治 森田 直賢 | 玉村 貞夫 森田 直賢 吉崎 正雄 清水 岑夫 |
| 製薬学第一 | 山崎 高應 | 大浦 彦吉 | 永田 正典 |
| 製薬学第二 | 横田嘉右衛門 飯田 武夫 | 飯田 武夫 吉井 英一 | 大浦 彦吉 北辻榮太郎 |
| 衛生化学 | 倉田 軍一 | 倉田 軍一 酒井 立夫 | 玉村 貞夫 谷口 貞子 |
| 薬剤学 | 桜井謙之介 | 野島俊二郎 松本 弘一 上田 道広 | 上田 道広 |
| 生物薬品化学 | 長谷 純一 | 松本 弘一 小橋 恭一 | 中井 昇 |
| 薬物学* | 北川 晴雄 | 北川 晴雄 木村 正康 岩城利一朗 | 岩城利一朗 |
| 講座外(薬学図書) | | 村上 清造 | |

36年2月製薬学を改組、*26年11月講座開設

第5節 公開講座等

公開講座および講習会は、今日的に言えばリカレント教育に相当するもので、地元薬業関係企業の要望と富山市の後押しに基づき実施された。公開薬学専門講座(薬学研究会)は大学発足の昭和24年から39年までの期間つけられたもので、そのプログラムは次表3・5のとおりであった。

また、昭和28年11月7日から翌29年2月13日までの毎週土曜日にわたって実施された薬学専門講座は、以下の11課題(担当)を内容とし各8~10時間

で行なわれたもので、受講者94名(男子69、女子25)のうち、薬剤師74名、医薬品販売関係者11名、公務員6名、教員3名であった。

薬学専門講座

植物成分の化学(中沖太七郎教授)

有機化学における電子説の応用(三橋 鑿物教授)

有機電気化学(志甫 伝逸教授)

化学療法剤(長谷 純一教授)

公衆衛生学（倉田 軍一助教授）
 最近の化学工業の進歩と製薬学（飯田 武夫助教授）
 最近の医薬品製剤の進歩（櫻井 謙之助教授）
 生薬類の試験鑑識法（三ッ野 門治助教授）

食を中心とした生活化学（松本 弘一助教授）
 品質管理（山崎 高應助教授）
 化学と文献（村上 清造助教授）

表 3・5 薬学研究講習会

| 研究課題 | 講師 | 昭和年・月 | 研究課題 | 講師 | 昭和年・月 |
|---------------|-------|-------|--------------|-------|-------|
| 薬用植物現地研究会(1) | 中沖太七郎 | 24.7 | 食品添加物 | 倉田 軍一 | 33.10 |
| 新薬調剤に関して | 櫻井謙之介 | 25.2 | 薬局製剤 | 櫻井謙之介 | 33.10 |
| 薬用植物現地研究会(2) | 中沖太七郎 | 25.7 | 現代医薬の基礎知識(3) | 北川 晴雄 | 34.10 |
| 薬用植物現地研究会(3) | 中沖太七郎 | 26.8 | 医薬品工業 | 飯田 武夫 | 34.10 |
| 環境衛生測定法 | 倉田 軍一 | 26.8 | 現代医薬の基礎知識(4) | 北川 晴雄 | 35.9 |
| 環境衛生実地指導 | 倉田 軍一 | 27.2 | フラボンの化学 | 中沖太七郎 | 35.10 |
| 薬用植物現地研究会(4) | 中沖太七郎 | 27.7 | 日本薬局方各論(1) | 櫻井謙之介 | 37.2 |
| 参考文献について | 村上 清造 | 28.2 | 日本薬局方各論(2) | 櫻井謙之介 | 37.2 |
| かび類に対する発育阻止物質 | 長谷 純一 | 28.3 | 日本薬局方各論(3) | 上田 道広 | 37.3 |
| 薬局に必要な基礎化学(1) | 志甫 伝逸 | 28.7 | 化学名の解説 | 塩谷 俊作 | 37.2 |
| 薬用植物現地研究会(5) | 中沖太七郎 | 28.8 | 日本薬局方 | 吉崎 正雄 | 37.2 |
| 学校の飲料水検査の実地指導 | 倉田 軍一 | 28.11 | 日本薬局方 | 松本 弘一 | 37.2 |
| 薬局に必要な基礎化学(2) | 志甫 伝逸 | 29.8 | 最近の各種製剤 | 櫻井謙之介 | 37.3 |
| 薬用植物現地研究会(6) | 中沖太七郎 | 29.9 | 最近の薬効基礎理論 | 北川 晴雄 | 37.9 |
| 簡易試験法 | 長谷 純一 | 30.8 | 医薬品の分光分析 | 高林 昇 | 37.9 |
| 処方用語について | 櫻井謙之介 | 32.10 | 和漢薬研究の将来 | 木村 正康 | 37.9 |
| 現代医薬の基礎知識(1) | 北川 晴雄 | 32.10 | 和漢薬と2、3の研究例 | 吉崎 正雄 | 37.10 |
| 中毒 | 倉田 軍一 | 32.10 | 家庭薬における和漢薬 | 木村 康一 | 39.7 |
| 製剤について | 櫻井謙之介 | 32.12 | 有峰ダム周辺の薬草 | 森田 直賢 | 39.8 |
| 現代医薬の基礎知識(2) | 北川 晴雄 | 34.10 | | | |

第6節 同窓会

富山大学薬学部時代の同窓会は「富山薬窓会」と呼称されていたが、その歴史は前身の官立富山薬専時代の「富山薬専同窓会」に始まり、会報「遠久朶」が創刊されたのは昭和8年である。当初は年3ないし4回程度発行され、学校の諸行事・教職員人事、入学者の紹介、卒業生の進路や消息、支部活動等の報告等の一般的な記事の他、学術の進歩にあわせて

総説や新学術用語の解説も取り入れてきたが、太平洋戦争に突入してから発行休止のやむなきに至った。約8年後の25年3月に発行された復刊第一号には、「母校復興促進期成会の結成と同会の偉業」ならびに具体的な復興計画が大々的に取り上げられ、同年5月の総会において同窓会名を「富山薬窓会」に変更することが決まった。31年から「遠久朶」の

発行はほぼ年一回新春となり、40年の通巻43号では五福校舎の様と各講座の紹介が主記事となり、翌年の44号では薬学部創立75周年記念式典（40.10.23）および記念事業の内容が詳細に報告された。なお、その後は大学紛争による2年間の休刊期があって、医薬大移行の54年の遠久袋は通巻56号になっている。

富山薬窓会の会員名簿は、25、35、39年と不定期に発行されたが、51年以降は4年毎の発行になっており、大正2年の富山県立薬専卒を第一回生とし卒業年次順に記載されている。この卒業回数は富山薬窓会独自のきまりであって、官立薬専最後の26年3月卒業生は39回、薬学部の第一回入学生（昭和24年）は40回生にあたる。なお、薬専時代の卒業生は計2,640名、薬学部の昭和28年から54年までの卒業生は2,285名である。

薬窓会の会長は当初薬学部長が務めていたが、44年の会則改正により会長は学外者となり石黒七三氏（第9回生）が選出され大学最後の54年までその任

にあった。なお、薬学部長は名誉会長となった。総会は特に支障の無い限り卒業式当日に開催され、引き続き教職員をまじえた卒業祝賀会が行なわれてきた。この祝賀会は、各支部からの出席者と新卒者との懇親の場でもあり支部活動の活発化に役立っているが、富山薬窓会は現在次の31支部を擁している。

| | | |
|--------|-------|--------|
| 北海道支部 | 宮城県支部 | 秋田県支部 |
| 山形県支部 | 福島県支部 | 首都圏支部 |
| 神奈川県支部 | 新潟県支部 | 富山県支部 |
| 石川県支部 | 福井県支部 | 長野県支部 |
| 静岡県支部 | 愛知県支部 | 三重県支部 |
| 滋賀県支部 | 京都支部 | 大阪支部 |
| 兵庫県支部 | 奈良県支部 | 和歌山県支部 |
| 鳥取県支部 | 島根県支部 | 岡山県支部 |
| 広島県支部 | 山口県支部 | 香川県支部 |
| 九州支部 | 沖縄県支部 | 大韓民国支部 |
| 台湾支部 | | |



五福移転を控えた奥田キャンパス（北日本新聞社提供）

第 4 章 薬学部の拡充・発展 (昭和38年から富山医薬大への移行まで)

第 1 節 五福キャンパスへの移転

4 学部（文理、教育、薬学、工学）で発足した富山大学の学部統合計画は大学設置当初に論議され、五福の富山連隊跡地に教育学部校舎を復旧させて残る 3 学部を同地に移す案が了解されてきた。その方針に沿って五福キャンパスの充実が進められ、昭和 37 年度に文理学部が移転、教養部棟も新営されたが、薬学部は工学部と同様、歴史的な背景と現状から五福移転には消極的であった。すなわち、前身の富山薬学専門学校の校舎は 20 年 8 月の富山大空襲で廃虚と化した。卒業生・政財界の絶大なバックアップを受けて短期間に復興、薬学部に変身してからも着実に整備が進められていたことから、五福地区への移転を素直に受け入れられる雰囲気ではなかった。とりわけ、広大なキャンパス面積（約 2 万 5 千坪）は将来の発展に魅力的で、教職員の間では狭隘な五福地区への移転に抵抗感が強かったのである。しかし、教育研究施設の質と量を保証するとの暗黙の了解と横田薬学部長（昭和 24～36 年）の説得をうけて五福地区への校舎移転を決定するに至った。その後第 4 代富山大学学長（36.12.20～44.3.4）を務めた横田嘉右衛門氏は、富山大学 15 年史の薬学部編にかかる寄稿の中で、『薬学部の五福集中については遠い将来何らかの批判はあると思うが、富山大学全体の

発展のため勇断、集中に踏みきられたことは誰しもが理解される所と思ひ私は過去にあまりこだわらず将来への発展を念願している』と記している。

五福地区の新校舎建設は 2 期にわたって行なわれた。昭和 38 年 3 月に正面の 1 号館（4 階建 延 1,189 坪）が竣工、次年度には東側後方に 2 号館（3 階建 延 885 坪）および 1、2 号館を結ぶ共通研究棟（2 階建 延 165 坪）と薬品庫（12 坪）が完成した（計 2,252 坪）。ちなみに当時の奥田地区薬学部の建物面積（延 2,464 坪）に近づいたものであった。

この新校舎建設にあたり、もう一つの重大関心事は奥田にあった大学付属図書館分館（一部 2 階建・延 110 坪）がどのような形で再現されるかであった。中央図書館の所在する五福キャンパスでは、図書館員が配置される「分館」を学部置くことは認められない、というのが大学当局の公式見解と考えられたからであった。しかし薬学部としては、薬専時代から蓄積してきた膨大かつ貴重な専門図書を今迄どおりの形態で利用したいこと、また、その方が他学部の化学系教官・学生にとっても便利であることを訴え理解を求めた。その結果、「薬学専門図書室」なる分室の設置が附属図書館規則の制定（昭和 39 年 6 月）により実現、図書館員も配置された。この分



薬学部校舎正面



薬学部校舎南側面

室（67坪）は1号館3階北端に設けられたが、その他の教育研究施設および事務部門は正面から見て以下のように配置された。

1号館

（1階）中講義室 事務室 学部長室 会議室

（2階）小講義室 薬品分析化学 薬剤学

（3階）図書分館 衛生化学 薬品生物化学

（4階）大講義室 薬物学 和漢薬研部門

2号館

（1階）実習室 薬剤製造学 薬品合成化学

（2階）実習室 薬品物理化学 薬化学

（3階）実習室 生薬学 和漢薬研部門

奥田から五福キャンパスへの研究室、事務室、図書室、機器等の引っ越しは39年4月から行なわれたが、校舎以外の主要な施設についても代替施設の建



奥田薬草園

この昭和40年度は、五福集中計画に沿って薬学部の学生寮「遠久朶寮」が姿を消した年でもあった。この寮の歴史は、戦災によって下宿先を失った富山薬学専門学校生を收容するため、戦災直後の昭和20年10月に富山市西の宮にあった日本海ドッグ株式会



遠久朶寮（富山市岩瀬古志町）

設が順調に進められた。奥田キャンパスの放射性同位元素研究室（約30坪）の代替施設として薬学部アイソトープ実験室（30坪）が、39年度に完成した全学共通の放射性同位元素総合研究室（RC40坪）に併設された。また、学部専用の実験動物飼育室（30坪）および教育用の薬用植物標本園と温室（合計約200坪）はアイソトープ総合研究室の南側に新設された。しかしながら、狭隘な五福キャンパスには到底持ち込めない施設として附属薬用植物園があった。奥田地区での薬用植物園は管理棟、作業棟、実験園、圃場等を含め約1万坪と広大ながら整備が行き届き、薬学部の貴重な財産であり行き届いた管理運営を誇りとしていた。それだけに移転候補地の決定に難航したが富山市寺町の呉羽山山麓に決定し昭和40年度に薬草・薬木の移植を完了した。



寺町薬草園

社の社員寮を借用し、遠久朶寮と命名したことに始まる。この遠久朶（オクダ）なる名称は、奥田の音読みに一致させた造語ながら一語一語に深い意味と願いを込めたもので、同窓会機関誌名だったものを借用したのである。

その後しばらくして同社の草島寮に移転したが、23年11月に東岩瀬古志町に所在した保土ヶ谷化学（株）の社員寮を購入、薬専生と薬学部生を收容した。毎年60名前後の寮生が苦楽を共にしながら勉学に励み、共同生活をエンジョイしてきたが、昭和40年9月、統合寮（新樹寮）が寺町に完成したことによって他学部寮（青冥寮、思明寮、紫苑寮）とともに廃止された。新樹寮は4階建・收容人員約440名の巨大寮だったことも影響して約3年以降に発生した学生運動の一拠点となり、正常な管理運用に支障を来す状態が長く続くことになった。

以上のように薬学部は、大正10年（1921）富山市奥田地区に設立された官立富山薬学専門学校の約30年にわたる歴史と伝統をうけつぎ、さらに15年目にしてキャンパス移転となったが、富山大学の看板学部と自負するにふさわしい施設と教育研究体制を整えての再出発であった。奥田キャンパス跡地は富山市の都市計画にもとづき住宅街に変身したが、その奥田寿町公園（旧校舎温室付近）の南西端には、同窓会有志によって記念石碑が建立され（昭和57年）、碑文にはそれまでの歴史が記されている。



記念石碑と碑文（富山市奥田寿町児童公園）

第 2 節 薬学・製薬化学 2 学科制

前章においても触れられているように、昭和37年度 2 年次学生から適用された薬学・製薬の 2 コース専攻制は、薬系大学卒業生の資質に対する社会的要請の変化、すなわち、薬学専門領域の拡大・高度化に対応しうる研究技術者の養成をうけて、自主的な学部規定の一部改正で実施されたものであった。両コースを専門授業科目の種類と履修条件（必須、選択）で特徴づけたもので、基礎科目に指定した薬化学や分析化学の履修条件を両コースほぼ共通とした上で、薬学コースでは生薬学、薬剤学を含む生物系科目を重視、製薬コースでは医薬品の合成・製造および物理化学系の科目に比重を置いたカリキュラム編成であった。このカリキュラムはその後、授業科目の追加、さらに選択科目に配置されていた薬剤師国家試験対象科目を必修選択にする等の手直しが行なわれた。

昭和41年度に至り待望久しかった製薬化学科の新設が認可され、薬学部は薬学科（入学定員50名）と製薬化学科（同50名）の 2 学科編成になった（20名の定員増）。各学科に割り当てられた講座は、すでに38年度に設置されていた大学院薬学研究科の担当講座でもあり、名称は下記のとおりである。

| 講 座 名 (昭和41.4) | |
|----------------|-------------|
| 薬 学 科 | 製 薬 化 学 科 |
| 薬 化 学 | 薬 品 物 理 化 学 |
| 薬 品 分 析 化 学 | 薬 剤 製 造 学 |
| 生 薬 学 | 薬 品 合 成 化 学 |
| 衛 生 化 学 | |
| 薬 剤 学 | |
| 薬 品 生 物 化 学 | |
| 薬 品 作 用 学 | |

以上の 2 学科制の発足に伴い専門教育科目カリキュラムの大改革が行なわれ、43年度入学生から適用された。新カリキュラムの特色は、教科担当に講座の枠を外し、教育科目を一般基礎薬学、専門基礎薬学、専門薬学、応用薬学等に区分し、教育効果を高めようとしたことである。また、安易な単位取得に歯止めをかけるため履修条件を厳しくし、学際領域の勉学にも配慮した。当時、全国的にカリキュラム改革が議論されていたが、本学部の新カリキュラムはその斬新さが他大学から注目され、照会や来訪が少なくなかった。

昭和49年度に環境衛生分析学講座が増設されたことで、薬系他大学に例を見ない14講座となり、入学定員も薬学科55名、製薬化学科50名になった。同時に専門教育カリキュラムの一部改正が行なわれ（次ページ表 4・1）昭和50年 4 月 1 日に施行された。

| 講 座 名 (昭和50.4) | |
|----------------|---------------|
| 薬 学 科 | 製 薬 化 学 科 |
| 薬 化 学 | 薬 品 物 理 化 学 |
| 薬 品 分 析 化 学 | 薬 剤 製 造 学 |
| 生 薬 学 | 薬 品 合 成 化 学 |
| 衛 生 化 学 | 生 物 薬 品 製 造 学 |
| 薬 剤 学 | 薬 品 製 造 工 学 |
| 薬 品 生 物 化 学 | 薬 品 製 造 化 学 |
| 薬 品 作 用 学 | |
| 環 境 衛 生 分 析 学 | |

なお、その頃には富山医科薬科大学への移行が決定されていたので、薬学部学生の在学期間を54年 3 月末とし 4 月 1 日以降は新大学において未取得科目を再履修することが定められた。

第3節 大学院薬学研究科(修士課程)および和漢薬研究施設の設置

五福新校舎1号館への第一期移転が行なわれた昭和38年度に、新制大学として全国初の大学院・薬学研究科(修士課程)ならびに附属和漢薬研究施設が設置された。それらの実現は薬学部の十年來の念願であったが、志甫学部長の陣頭指揮のもと富山県当局・地元製薬産業の継続的な支援、関係各位の理解

によって実現したもので、富山大学のその後の発展にも繋がった快挙であった。それまでの薬学部の教育研究組織は所謂学科目制の下にあったが、研究・教育の効率化と質的向上を図るべく学内措置で講座制を実施、昭和37年度から2コース制(薬学・製薬コース)を取入れていた。

表4・1 薬学・製薬化学2学科制における専門教育科目(昭和50年度)

| 薬学科 | 製薬化学科 | 区分 | 授業科目 | 単位数 | 薬学科 | 製薬化学科 | 区分 | 授業科目 | 単位数 |
|-----|-------|--------|----------|-----|-----|-------|------|----------|-----|
| (選) | (選) | 一般基礎薬学 | 応用数学 | 2 | (選) | (選) | 専門薬学 | 薬局方概論 | 2 |
| (選) | 必修 | " | 基礎量子化学 | 2 | (選) | (選) | " | 薬品製造化学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 基礎物理化学 | 2 | (選) | (選) | " | 生薬学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 基礎物理化学 | 2 | (選) | (選) | " | 衛生化学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 化学分析学 | 2 | (選) | (選) | " | 薬事衛生法規 | 1 |
| 必修 | 必修 | " | 物理分析学 | 2 | (選) | (選) | " | 微生物薬品製造学 | 1 |
| 必修 | 必修 | " | 有機化学 | 5 | (選) | (選) | " | 薬剤学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 無機化学 | 1 | (選) | (選) | 応用薬学 | 薬学概論 | 1 |
| (選) | (選) | " | 推計学 | 1 | (選) | (選) | " | 薬学文献学 | 1 |
| 必修 | (選) | " | 病原微生物学 | 1 | (選) | (選) | " | 物理化学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 基礎生化学 | 2 | (選) | 必修 | " | 構造有機化学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 細胞生物学 | 2 | (選) | (選) | " | 構造有機化学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 細胞化学 | 2 | (選) | (選) | " | 電子工学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 基礎薬理学 | 2 | (選) | (選) | " | 化学工学 | 2 |
| 必修 | 必修 | " | 放射化学・保健学 | 1 | (選) | (選) | " | 和漢生薬学 | 2 |
| 必修 | (選) | " | 基礎医学 | 3 | (選) | (選) | " | 衛生化学 | 1 |
| 必修 | (選) | 専門基礎薬学 | 分析化学 | 2 | (選) | (選) | " | 病態生化学 | 1 |
| 必修 | (選) | " | 生薬化学 | 2 | (選) | (選) | " | 臨床化学 | 1 |
| 必修 | (選) | " | 生物化学 | 2 | (選) | (選) | " | 薬局管理論 | 1 |
| 必修 | (選) | " | 衛生化学 | 2 | (選) | (選) | " | 応用薬理学 | 2 |
| 必修 | (選) | " | 薬剤学 | 2 | 必修 | 必修 | | 演習 | 2 |
| 必修 | (選) | " | 薬品作用学 | 2 | 必修 | 必修 | 実習 | 有機化学系実習 | 3 |
| 必修 | (選) | " | 環境衛生分析学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 分析化学系 | 2 |
| (選) | 必修 | " | 薬化学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 物理化学系 | 2 |
| (選) | 必修 | " | 合成化学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 生物化学系 | 2 |
| (選) | 必修 | " | 物理化学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 薬剤系 | 2 |
| (選) | 必修 | " | 生物薬品製造学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 生薬学 | 1 |
| (選) | 必修 | " | 薬剤製造学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 放射化学・保健学 | 0.5 |
| (選) | 必修 | " | 量子化学 | 2 | 必修 | 必修 | " | 機器分析実習 | 0.5 |
| (選) | 必修 | " | 薬品製造化学 | 2 | 必修 | 必修 | | 卒業研究 | 7 |

(選)は選択科目を、印は当該学科の選択科目ではないが希望により選択することのできる科目を表す。
薬学科は必修科目62単位以上、選択科目25単位以上。製薬化学科は必修科目64単位以上、選択科目23単位以上。

それが大学院設置により正式に講座制となったわけで、薬学専攻の10講座（薬化学、薬品分析化学、生薬学、薬品物理化学、衛生化学、薬剤学、薬品生物化学、薬品作用学、薬品合成化学、薬剤製造学）が設けられた。一方、和漢薬研究施設は5部門（資源開発、生物試験、臨床利用、病態生化学、化学応用）を計画したもので、初年度には資源開発部門が発足、昭和47年度までに全組織が整った。

当初10講座でスタートした薬学研究科にはその後、生物薬品製造学（昭42）、薬品製造工学（昭43）、薬品製造化学（昭44）、環境衛生分析化学（昭49）が増設され計14講座になり、入学者定員も20名から26名に増加した。

初年度38年の入学者選抜（定員20名）は、4月23・24日に行なわれた。専攻科目を開設講座関連の10特論とし、試験科目は基礎3科目（一般物理化学、有機化学、分析化学）、専門科目（第1および第2志望の専攻科目）、外国語（英語およびドイツ語）

および口述試験が課せられ14名が入学した。次年度入試は標準的な日程（38年10月7・8日）で行なわれたが、薬物学専攻が第一および第二薬物学になり、受験の専門科目は志望専攻ごとの3科目指定に改正された。その後、生物薬品製造学、薬品製造工学、薬品製造化学を加えて13講座になった45年には、製薬化学専攻の増設が認可され、入学定員は薬学専攻14名、製薬化学専攻12名の計26名になった。入試科目（専門）も大幅に改正すべく議論を重ね、基礎科目（有機化学、物理化学、生物化学）を共通とし志望専攻の1科目を課することにした。この変更は学部カリキュラムの大改正（43年度入学生適用）の思想に沿ったもので、ほぼ定着し環境衛生分析化学講座の増設を経て富山医薬大へ移行するまでつづいた。その間、授業科目の改正も数回おこなわれているが、次表4・2に初年度（10講座）と14講座になった時点での科目構成と履修条件を掲げた。

表4・2 薬学研究科授業科目の推移（昭和38/50年度）

| 専攻課程（昭和38初年度） | | 専攻課程（昭和50年現在） | | | |
|---------------------|-----|---------------|-----|---------------------|-----|
| 薬学専攻（定員20名） | | 薬学専攻（定員14名） | | 製薬化学専攻（定員12名） | |
| 授業科目 | 単位数 | 授業科目 | 単位数 | 授業科目 | 単位数 |
| 薬化学特論 | 2 | 薬化学特論 | 2 | 薬品物理化学特論 | 2 |
| 薬品分析化学特論 | 2 | 薬品分析化学特論 | 2 | 薬品合成化学特論 | 2 |
| 生薬学特論 | 2 | 生薬学特論 | 2 | 薬剤製造学特論 | 2 |
| 衛生化学特論 | 2 | 生薬学特論 | 2 | 生物薬品製造学特論 | 2 |
| 薬剤学特論 | 2 | 衛生化学特論 | 2 | 薬品製造工学特論 | 2 |
| 薬品生物化学特論 | 2 | 衛生化学特論 | 2 | 薬品製造化学特論 | 2 |
| 薬物学特論 | 2 | 薬剤学特論 | 2 | 薬学研究実験 | 18 |
| 薬品物理化学特論 | 2 | 薬品生物化学特論 | 2 | 薬学演習 | 4 |
| 薬品合成化学特論 | 2 | 薬品生物化学特論 | 2 | 印は必修 講義は4科目8単位以上 | |
| 薬品製造化学特論 | 2 | 薬品作用学特論 | 2 | | |
| 薬学研究実験 | 18 | 薬品作用学特論 | 2 | | |
| 薬学演習 | 4 | 環境衛生学特論 | 2 | | |
| 印は必修 講義は4科目8単位以上 | | 薬学研究実験 | 18 | | |
| | | 薬学演習 | 4 | | |

第4節 研究活動

大学院の設置、すなわち講座制確立にともなう最大のメリットは、文部省配分の教官当積算校費のアップと教官定員増の期待であったが、同時に研究業績の質・量が学内外から厳しく問われることになった。当時、講座ならびに和漢薬研究施設担当教授の平均年齢は低く体力も意欲も充実しており、自己の

研鑽はもとより大学院生の教育・研究指導に厳しい態度で臨んだ。必然的に大学院生の研究結果と学力に対する評価が厳格になり、学位論文審査では主査（指導教官）に2名の副査をつけ旧制大学の博士コース並の審査が行なわれた。

研究実験の高度化推進に欠くべからざる測定機器

表4・3 大学院薬学研究科（修士課程）講座構成と教員

| 講座名 | 教授 | 助教授・講師 | 助手 | | 教務職員・技官 |
|---------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 薬化学 | 三橋 監物 増田 克忠 | 野村 敬一 | 野村 敬一 安立 準 | 塩谷 俊作 | 堀 幸子 |
| 薬品分析化学 | 志甫 伝逸 | 高林 昇 田上昇一郎 | 田上昇一郎 中野 琢 | 金岡 又雄 | 山田 道子 正橋 昭子 |
| 生薬学 | 森田 直賢 | 清水 岑夫 | 清水 岑夫 有澤 宗久 | | 内田 節子 福田 昌子 |
| 薬品物理化学 | 榎本 三郎 | 井上 正美 | 井上 正美 柏木 寛 | 星野 重孝 棚田 成紀 | 上山 勉 |
| 衛生化学 | 倉田 軍一 柳田 友道 | 酒井 立夫 | 宮原 龍郎 辻 堯 | | |
| 薬剤学 | 桜井謙之介 小泉 保 | 松本 弘一 上田 道広 | 安立 準 掛見 正郎 | 江幡真知子 | 辻堂 清 |
| 薬品生物化学 | 長谷 純一 | 小橋 恭一 | 中井 昇 三井健一郎 | | 三井健一郎 |
| 薬品作用学* | 北川 晴雄 木村 正康 | 岩城利一郎 脇 功巳 | 松井 竹史 木村 郁子 | | 脇 浩子 |
| 薬品合成化学 | 飯田 武夫 吉井 英一 | 吉井 英一 小泉 徹 | 北辻栄太郎 竹内 義雄 | | 森田名津子 織部多喜子 |
| 薬剤製造学 | 山崎 高應 堀越 勇 | 永田 正典 竹口 紀晃 | 井上 信 森井 孫俊 | 的場 勝英 | 佐野 明美 |
| 生物薬品製造学 (42年度設置) | 西 荒介 | 菅野 延彦 | 岡村 昭治 浅水 哲也 | | 浅水 哲也 |
| 薬品製造工学 (43年度設置) | 永原 茂 | 北川 泰司 | 森 佳洋 | | |
| 薬品製造化学 (44年度設置) | 山崎 高應 | 永田 正典 的場 勝英 | 小笠原 信 高畑 廣紀 | 的場 勝英 | 宮城 正子 藤沢寿美子 |
| 環境衛生分析学 (49年度設置) | 狐塚 寛 | 宮原 龍郎 | 森 正明 | | 内多 美樹 |

*旧薬物学（39年4月名称改正）

共通施設等職員

| 部署 | 職員（文部事務官、文部技官） |
|---------|-------------------------|
| 附属薬用植物園 | 藤野 廣春 内山 幸吉 橋本竹二郎 近藤 誠三 |
| 元素分析室 | 森腰 正弘 堀（高見）春男 |
| 質量分析室 | 森腰 正弘 |
| 実験動物飼育室 | 栗山 正彦 |

の充実も着実に進められた。文部省科学研究費や概算要求によって購入された機器は、共同施設棟2階の測定室や講座研究室に続々と配置され、共同利用の便が図られた。また、元素分析室、核磁気共鳴測定装置や質量分析装置のような新鋭機器は他学部の測定依頼にも対応した。一方、学術研究に不可欠である学術図書の購入費の増大は頭の痛いところであった。教官研究費を充当せざるを得ない大学のシステムの下にあって、富山大学薬学部文献研究会からの援助は大変に有難かった。かかる組織の発祥は、富山薬専時代の昭和15年に地元製薬企業を中心に、お互いに利用の便を図ろうとして結成された「図書館後援会」にある。大戦終結後、幸いにも戦災を免れた貴重な財産である図書館蔵書の充実のため、名前を「図書館利用者会」と一新し、学術雑誌のバツ

クナンバーを始めとする各種図書の寄贈がつづけられた。戦後の奥田時代だけで約270万円分との記録がある。その後、富山大学薬学部図書館後援会、同文献研究会と組織替えされ、薬学文献の探索法等の講習会をも手掛け、学生の教育にも大変役立ったところである。

なお、大学院薬学研究科（修士課程）の講座構成と在職職員等、ならびに共通施設等の職員構成は、前頁の表4・3のとおりであった。

また、研究の具体的テーマと業績は、次の表4・4にまとめた「文部省科学研究費交付一覧」で端的に知ることができる。なお、同表以下に教育・研究活動を通じて受けた学会関係の受賞者と年度・課題を追記している。

表4・4 薬学部科学研究費交付一覧(昭和24年度～53年度)

| 年度 | 研究種別 | 研究代表者 | 研究課題 | 交付金(千円) |
|-----|------|--------|-----------------------------------|---------|
| 昭24 | 各個研究 | 横田嘉右衛門 | ジメチルアミン誘導体の研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 中沖太七郎 | 駆虫生薬の化学的研究 | 30 |
| " | 各個研究 | 倉田 軍一 | 甲殻類皮殻成分の研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 三橋 監物 | 含窒素異項環化合物の逆性石鹼 | 100 |
| " | 各個研究 | 三橋 監物 | フェナントリジン誘導体の研究 | 30 |
| " | 各個研究 | 飯田 武夫 | 撫順産頁岩油成分の研究 | 30 |
| " | 各個研究 | 山崎 高應 | 特殊構造を有するカルボン酸アミド誘導体の研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 中塩清之助 | 日本民間医術における民族学的調査 | 10 |
| 25 | 各個研究 | 横田嘉右衛門 | 砒素有機化合体の合成研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 中沖太七郎 | 駆虫生薬の化学的研究(継続) | 20 |
| " | 各個研究 | 三橋 監物 | フェナントリジン誘導体の研究(継続) | 20 |
| " | 各個研究 | 桜井謙之介 | 活性土類を応用したアルカロイド薬品の製造研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 山崎 高應 | 天然エメチン及びC-ノルエメチンバイマン諸種の化学反応に関する研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 飯田 武夫 | 頁岩油成分の研究 | 20 |
| 26 | 総合研究 | 横田嘉右衛門 | 医薬品製剤の防黴に関する研究 | 400 |
| 27 | 総合研究 | 横田嘉右衛門 | 医薬品製剤の防黴に関する研究 | 200 |
| " | 助成研究 | 山崎 高應 | アザベンゾキノリチン類の合成研究 | 30 |
| 28 | 総合研究 | 横田嘉右衛門 | 医薬品製剤の防黴に関する研究(継続) | 240 |
| " | 助成研究 | 倉田 軍一 | キチンの化学的研究 | 20 |
| " | 各個研究 | 三橋 監物 | 水素化フェナントリジン諸誘導体の研究 | 60 |
| 29 | 各個研究 | 三橋 監物 | 同上(継続) | 40 |
| " | 各個研究 | 中沖太七郎 | 薬用資源の研究 | 50 |
| " | 助成研究 | 北川 晴雄 | 窒素不含催眠性物質の研究 | 25 |
| " | 助成研究 | 山崎 高應 | 含窒素ベンゾキノリチン類の合成研究 | 20 |

| 年度 | 研究種別 | 研究代表者 | 研究課題 | 交付金(千円) |
|-----|-----------|-------|-------------------------------------|---------|
| 昭30 | 各個研究 | 志甫 伝逸 | ピリダチン類の含硫化合物及びその誘導体の合成研究 | 100 |
| " | 助成研究 | 大浦 彦吉 | -及び-各種環状高級脂肪酸の合成について | 30 |
| " | 助成研究 | 三ツ野問治 | 地衣成分の微量化学的研究 | 30 |
| 31 | 各個研究 | 飯田 武夫 | 米国コロラド産頁岩油成分の研究 | 140 |
| " | 助成研究 | 高林 昇 | ピリダチンの核置換反応について | 30 |
| " | 助成研究 | 上田 道広 | 抗黴性薰蒸剤による医薬品の保存に関する研究 | 30 |
| 32 | 各個研究 | 飯田 武夫 | 米国コロラド産頁岩粗油に含まれる窒素化合物の研究 | 200 |
| 32 | 試験研究 | 北川 晴雄 | クマリン誘導体の薬品的応用 | 300 |
| 33 | 試験研究 | 北川 晴雄 | クマリン誘導体の薬品的応用研究 | 300 |
| 34 | 各個研究 | 中沖太七郎 | 薬用資源の研究 | 50 |
| 35 | 各個研究 | 長谷 純一 | 化学療法剤に関する研究 | 50 |
| " | 各個研究 | 木村 正康 | アセチルコリンレセプターにおける有機化合物の理論的体系化の方法論の設定 | 50 |
| " | 機関研究 | 中沖太七郎 | 牛黄の生薬化学的及び薬理学的研究 | 3,750 |
| 36 | 機関研究 | 中沖太七郎 | 同上(継続) | 450 |
| " | 各個研究 | 飯田 武夫 | Dispersed Sodiumの有機合成への応用 | 200 |
| " | 試験研究 | 北川 晴雄 | 含ハロゲン芳香族化合物の薬品的応用研究 | 500 |
| 37 | 各個研究 | 三橋 監物 | 含窒素Bicyclo[3.3.1]nonane類の薬学的研究 | 200 |
| " | 機関研究 | 北川 晴雄 | 牛黄の生薬化学的及び薬理学的研究(継続) | 500 |
| " | 機関研究 | 桜井謙之介 | 医薬品の防カビ研究 | 5,800 |
| 38 | 機関研究 | 桜井謙之介 | 医薬品の防カビ研究(継続) | 550 |
| 39 | 機関研究 | 桜井謙之介 | 医薬品の防カビ研究(継続) | 500 |
| " | 機関研究 | 志甫 伝逸 | 和漢薬に特異な生物活性と構成成分との関連について | 7,750 |
| 40 | 機関研究 | 志甫 伝逸 | 同上(継続) | 2,880 |
| 41 | 各個研究 | 長谷 純一 | ガス壊疽菌毒素の生化学的研究 | 250 |
| " | 各個研究 | 上田 道広 | 医薬品の体内変化に関する研究 | 110 |
| " | 機関研究 | 志甫 伝逸 | 和漢薬に特異な生物活性と構成成分との関連について(継続) | 960 |
| " | 機関研究(A) | 三橋 監物 | 中枢性鎮痛剤の立体化学構造と作用機序に関する研究 | 10,710 |
| 42 | 各個研究 | 酒井 立夫 | ビタミンB1のアミノ酸による脱硫化合物の研究 | 110 |
| " | 試験研究 | 木村 康一 | 糖尿病治療生薬の応用研究 | 900 |
| " | 機関研究 | 三橋 監物 | 中枢性鎮痛剤の立体化学構造と作用機序に関する研究(継続) | 2,150 |
| 43 | 機関研究 | 三橋 監物 | 同上(継続) | 500 |
| " | 一般研究(D) | 西 荒介 | 糸状菌細胞の機能的分化に関する研究 | 230 |
| " | 一般研究(D) | 吉井 英一 | 強心作用を有するステロイドの合成研究 | 200 |
| " | 試験研究 | 木村 正康 | 糖尿病治療生薬の応用研究 | 1,010 |
| 44 | 一般研究(D) | 野村 敬一 | 含窒素脂環状医薬品の合成研究 | 220 |
| " | 一般研究(D) | 西 荒介 | 微生物の生活環における細胞機能の変化に関する研究 | 210 |
| " | 奨励研究(A) | 中島 松一 | 再生肝ラットにおける抗体産生 | 150 |
| 45 | 試験研究(1) | 三橋 監物 | 新規モルフィン類似化合物の医薬品化への化学的および薬理学的研究 | 1,000 |
| " | 試験研究(2) | 上田 道広 | 医薬品の経皮吸収に関する研究 | 950 |
| 46 | 試験研究(1) | 木村 正康 | 新規モルフィン類似化合物の医薬品化への化学的および薬理学的研究(継続) | 900 |
| " | 試験研究(2) | 上田 道広 | 医薬品の経皮吸収に関する研究(継続) | 900 |

| 年度 | 研究種別 | 研究代表者 | 研究課題 | 交付金(千円) |
|-----|-----------|-------|--------------------------------------|---------|
| 昭46 | 総合研究(A) | 西 荒介 | 植物の培養組織による細胞の機能調節と成分の生合成に関する研究 | 2,700 |
| 47 | 総合研究(A) | 西 荒介 | 同上(継続) | 3,000 |
| " | 一般研究(D) | 小泉 徹 | オキソホスホニウム類縁化合物の還元的 C-O 解裂反応 | 380 |
| 48 | 一般研究(C) | 北川 泰司 | ノズル分子線による励起種の発光の研究 | 1,100 |
| " | 一般研究(C) | 木村 正康 | コリン作動性機作におけるミオグロビンの薬理学的役割について | 1,630 |
| " | 一般研究(C) | 渡辺 和夫 | 胃液分泌の機能調節と薬物作用に関する研究 | 900 |
| " | がん特別(2) | 塚田 欣司 | 癌細胞におけるポリヌクレオチドリガーゼの機能 | 3,000 |
| 49 | 一般研究(B) | 木村 正康 | 神経筋組織培養標本を用いたコリン作動性薬物の作用機序 | 3,350 |
| " | 一般研究(C) | 山崎 高應 | Diazasteroids の合成研究 | 1,240 |
| " | 総合研究(A) | 森 佳洋 | ノズル分子線による分子会合の研究 | 300 |
| 50 | 一般研究(B) | 榎本 三郎 | 銅()錯体の触媒活性に関する研究 | 4,000 |
| " | 一般研究(C) | 小泉 徹 | 含リン複素環化合物の化学とその応用 | 1,200 |
| " | 一般研究(D) | 西 荒介 | 粘菌、physarium polycephalumの菌核形成に関する研究 | 320 |
| " | 一般研究(D) | 野村 敬一 | アジドによる含窒素脂環式化合物の合成 | 390 |
| " | 試験研究(2) | 吉井 英一 | 強心性ステロイドの合成 | 1,000 |
| 51 | 総合研究(A) | 長谷 純一 | 脂質およびその代謝酵素の生体膜における役割 | 2,500 |
| " | 一般研究(C) | 柳田 友道 | 水界に生息する好貧栄養細菌の生理生態学的研究 | 1,320 |
| " | 一般研究(C) | 竹口 紀晃 | 胃酸分泌細胞膜の膜透過と膜電位 | 1,400 |
| " | 一般研究(C) | 小橋 恭一 | 尿素窒素の腸肝循環と消化管ウレアーゼの役割 | 1,400 |
| " | 奨励研究(A) | 岡村 昭治 | 植物培養細胞におけるコルヒチンの作用と微小管の役割について | 320 |
| " | 奨励研究(A) | 掛見 正郎 | 抗炎症性解熱鎮痛薬の生体内薬物レベルと薬理効果の薬動学的シュミレーション | 300 |
| " | 試験研究(1) | 柳田 友道 | 生物製剤の微生物汚染並びにその防除に関する研究 | 1,800 |
| 52 | 一般研究(B) | 北川 泰司 | ノズル分子線により生成する冷却分子種の分光学的研究 | 4,600 |
| " | 一般研究(C) | 柳田 友道 | 水界に生息する好貧栄養細菌の生理生態学的研究 | 500 |
| " | 一般研究(C) | 小泉 保 | 臨床薬動学を指向した薬物生体内挙動と薬理効果動態の総合的解析 | 1,500 |
| 53 | 環境科学(1) | 柳田 友道 | 赤潮に関する基礎生物学的研究 | 2,000 |

日本薬学会賞

北川 晴雄 昭和32年度日本薬学会奨励賞
「クマリン誘導体の薬品的研究」
大浦 彦吉 昭和35年度日本薬学会奨励賞
「ミコール酸およびその類縁化合物の
合成研究」
村上 清造 昭和38年度日本薬学会教育賞
吉井 英一 昭和39年度日本薬学会奨励賞
「ホトサントニン酸の構造研究」
木村 正康 昭和41年度日本薬学会奨励賞
「アセチルコリン受容体に関する分子
薬理学的研究」

櫻井謙之介 昭和42年度日本薬学会教育賞
飯田 武夫 昭和44年度日本薬学会教育賞
三橋 監物 昭和46年度日本薬学会教育賞
小泉 徹 昭和52年度日本薬学会奨励賞)
「フォスフォラスアミド類の加水分解
機構とその応用研究」
志甫 伝逸 昭和52年度日本薬学会教育賞)
宮田専治学術振興会学術賞(日本薬学会推薦)
長谷 純一、小橋 恭一(47.7)
「薬物の化学構造と酵素活性におよぼ
す影響の相関の研究」

第5節 薬学部創立75周年記念

富山大学薬学部の歴史は、本誌「前史」の中で詳述されているように、明治26年（1893年）8月に設立された共立富山薬学校を発祥とするものである。その後、富山市立富山薬学校（1897年）、同薬業学校（1900年）、富山県立薬学校（1907年）、同薬学専門学校（1910年）を経、大正9年（1920年）に官立富山薬学専門学校に移管された。同校は全国初の官立の薬学専門学校で、新校舎は市内奥田地区（敷地1万坪強）に約2年後完成した。その後、1940年頃には敷地約1万5千坪、薬草園約1万坪という広大なキャンパスと充実した教育・研究諸施設を誇るまでに至ったが、1945年8月1日の米軍機大空襲によって校舎は灰燼に帰した。横田校長は直ちに戦災復興の陣頭指揮にあたり復興期成会を結成、全国の薬業関係企業、卒業生および在学生父兄有志、職員から尊い拠金を得、実習・研究室棟3棟の新築にこぎつけた。それが追風になって国の予算処置がなされ、昭和22年度までには教育研究に支障のない程度にまで復旧、暫くして校舎前面の管理棟2階に富山大学本部が置かれた。昭和26年3月には第39回卒業生を送りだし、富山薬学専門学校30年の歴史に幕をとり



創立75周年記念式典

た。代わって奥田キャンパスには、学制改革によって後を継いだ富山大学薬学部の専門課程学生が入り、恵まれた施設と環境の下でのびのびと勉学・研究に励みながら青春を謳歌したのであるが、学部集中計画に沿って五福地区へ移転（昭和37、38年）を余儀なくされた。教職員は精神的に苦痛を味わったが、結果的に薬学部の大飛躍につながったことは別項に記したところである。

昭和40年10月23日には、創立75周年祝賀式典が前年に竣工した学生会館において挙行された。志甫薬学部長（昭和49年富山薬専卒）の挨拶について、吉田実富山県知事、石黒七三記念事業委員長（同窓会長）をはじめとする来賓各位の祝辞が寄せられ、参列者一同は波乱の歴史と着実な発展に思いを馳せ感慨を深くした。記念事業として計画されたのは、「富山大学薬学部七十五年史」の刊行ならびに記念資料館の寄付であったが、それらに要する資金は同窓会（薬窓会）会員、薬業界（主として地元製薬企業）から寄せられた。記念資料館（百坪弱）は、和漢薬研究施設の北側に隣接して建築され、薬学部の多目的施設としても利用されることになった。



祝賀会（横田、石黒、志甫）

第6節 薬学部と学生運動

薬学部の教授会と学生自治会（薬友会）との関係は、薬学部創立75周年記念式典（40年10月）の頃までは大体平穏に過ぎたが、その後は全国的な学生運動の高まりをうけて軋みが生じ、日を追うごとに増

幅されていった。まずは講義室における座席指定と出欠確認の制度、学生の自主性を無視するような制度を廃止しろという要求が出され、付随して留年制度も取り上げられた。言うなれば、学生に不利な制

度を教授会が一方的に決定し押し付けてくるのは民主的ではないということであった。ついで、43年度に入って陸上自衛隊衛生部所属の一卒業生が出身講座で1年間の研修を願い出、研究生として入学許可されたことが取り上げられた。学生集会で、自衛隊を憲法第9条にてらし違憲であると出席教授連を追及、そして、入学許可の取消しと審議内容の開示を求めた。違憲問題が平行線をたどっているうちに当該自衛官は自主退学、教授会は公開質問状に対する教授会見解を提示し沈静化を図ったものの解決に至らず、新たに「振興会問題」が浮上した。時あたかも経済学部の教官人事紛争にからんで、一部の過激派学生（反日共系）によって大学本部が不法占拠（43年11月12日未明）されるという異常事態にあって、教授会は一段と苦しい立場に置かれることになった。

この振興会問題とは、35年頃から学生の入学時に父兄から得ていた寄付金、薬学部振興会費の収支決算の公開要求とその背景の追及であった。振興会は薬学部長を務めていた志甫教授が教授会に図ることなく組織し資金運用されてきたらしく、他の教官は全く関知していないと主張した。志甫教授は厳しい追及をうけたが、振興会は学部の外郭団体であり一役員にすぎないので経理の公開はできないとした。となると、振興会と同窓会との繋がりが想像され、学生側は同窓会（富山薬窓会）役員に対して振興会会則の有無等を糾したが前向きな回答は得られなかった。不信任を募らせた学生達は、学生集会を開いて10項目要求の大衆団交を決議した。44年2月8日夕刻から翌朝にまで及んだ集会では、教授会議事録および薬窓会議事録・帳簿の全面公開、振興会問題の責任の所在、助成会（43年4月発足）の解散、さらには遡って留年・出席制度および自衛官入学許可の自己批判、そして大衆団交権を認めるよう迫った。要求項目の殆どは教授会として容認できず、一方的に学生の主張を聞くだけに終わった。

この頃、全学的な問題と過激派学生の活動がからんで、五福キャンパスは教育学部を除く各学部ではストライキに突入、薬学部学生も2月15日に無期限

ストを打出し、全学大衆団交推進会議なるものが「大衆団交」を要求してきた。3月10日に開かれた全学総決起集会の後、まず教育学部、教養部が、ついで文学部、薬学部の各事務室を封鎖した。大学側は教育研究の正常化に向けて全力を尽くしたが好転の萌しは認められず、ついに4月9日早朝、職場を奪われた教職員多数が機動隊の協力をえて、すべての封鎖を解除した。この機動隊導入に反発して、教育・工学の両部もストに突入し全学ストにエスカレートした。そして、5月28日に大学本部と経済学部が再封鎖され、同31日には薬学部もヘルメットで武装し角材をもった過激派学生の一団が突入し全面的に占拠・封鎖されるにいたった。

大学側は全学集会に応じるなど、正常化にむけて懸命の努力を重ねたが酬われることなく、苛立ちが強まるだけであった。一方、早期授業再開を望み占拠封鎖に反対するノンセクトの一般学生達は「全学正常化会議」を結成して動き出した。8月26日夜、教職員に協力して大学本部、経済学部教棟の封鎖解除を行ない、ついで薬学部に向かったが、推進会議派は火炎瓶を投げるなど激く抵抗し危険なので両者対峙のまま夜をすごした。翌日、教職員や一般学生が大挙して集合、退去を求める怒号に脅えたのか正午過ぎに自主的に退去・四散した。その後、一般学生が主導権をにぎり、9月23日の薬学部学生大会でストライキ解除を決議、25日から授業が再開されることになった。

以上のように、全国的な大学紛争の嵐に巻き込まれたといえようが、学部それぞれに紛争の種を宿していたことは率直に反省すべきことであった。薬学部では主題が金銭問題であったため若い学生諸君には理解してもらえず苦悩したが、反省すべき点は多々あったと思われる。一方、悪ときめつけられた外部資金の導入や産学共同研究は、今日では大いに奨励されていることである。封鎖により8カ月近くも教育・研究が麻痺状態にあったツケは計り知れないものがあつたが、その回復に教官・学生ともども真剣に取り組む飛躍的な発展に繋げることができたことをもってたとすべきであろう。

第5章 医科薬科大学の創設

戦後20年にして、産業経済の第一期成長期を迎えた頃から次第に産業公害、医薬公害、環境の劣化等がしのび寄ってきたことから、健康と福祉医療の施策も高齢化社会の到来とともに看過出来ぬ状況になってきた。この頃、政府は国民の健康と福祉を護るためとして、全国的に無医大県解消を図るようになって、富山県でも既に昭和30年代後半から、日本海医科歯科大学、富山県立医科大学などの構想があったものの莫大な経費に鑑み結実せず、富山大学医学部構想に変わって行き、昭和47年末頃、富山大学にその構想が持ち込まれ県当局と再三度の接触がもたれた。そして48年春、富山大学事務局でも医学部設置の概算要求書の草案が作成された。

一方、大学では、文理学部、薬学部とも現在の五福地区に移転したこともあって、一旦昭和28年の大達文相の時代に決定された工学部の整備について「工学部の整備は高岡地区で行なう」との覚書を白紙撤回して五福へ移転するとの案が再燃し、工学部教授会の五福移転決議が評議会にもたらされていた。評議会では、医学部設置を了承しこれを推進することには賛成であるが、大学紛争以前の昭和40年代に提出されている工学部移転案がこれと競合することのないよう配慮されたいとのことで、両者とも推進するとして、先述の概算要求を出すこととした。このように医学部設置問題について、48年4月頃まで、県と大学側が接触してきたが、構想の具体化の過程で合意が得られず、県側は医学部構想を白紙還元し単科の医科大学構想で出直したい、については参考のため富山大学概算要求書のうち医学部設置の部分を県側に割愛されたいとのことで、大学はこれを県側に提供した。

時に、後藤秀弘学長の任期が終り近い頃であった。後を継いだ林勝次新学長のもとで、長く懸案下でありながら富山大学紛争の原因にもなった経済学部・経営学科の設置の他、和漢薬研究所の創設、教育学部・養護教員養成課程、および薬学部・環境衛生分

析学講座の増設に邁進することが議決され、48年12月30日の大蔵省内示によっていずれも認められた。他方、県側では、単科医科大学について独自に文部省に働きかけた結果、これも12月30日の内示で調査費が認められた。

医科大学問題については、他府県にあっては、島根、大分、高知、佐賀、香川に次いで、福井、山梨が富山より先行していたので、調査費が認められて面目を施したことになった。通常、調査費が認められると次は1～2年後に創設準備費がつき、次いで創設費が認められる。

このような次第で、富山大学では経営学科、和漢薬研究所等が発足した。そして医科大学問題は、実にそれからが正念場だった。県側としては既に先行している他府県を追い越さねばならなかったのである。政府は毎年1～2の医科大学を創設する考えの一方で、もともと、既設大学医学部の定員増で賄う考え方も選択肢として残されていた。その上、富山の場合、福井医科大学準備室が昭和48年に金沢大学に設けられていたこともあって、並大抵の努力では容易ではなかった。県では既に発足していた富山医科大学誘致期成同盟会が、この頃まで富山大学とは無関係に2回開催されていた。多分第2回が49年の5、6月頃のようなのである。

この時、同盟会のメンバーの中から、富山大学薬学部と和漢薬研究所ともども一緒にした富山医科薬科大学へと、発想の転換ができぬかとの破天荒な提案もなされたという。丁度その頃、薬学部長は文部省上層部から「富山は医科大学設置を要望しているが、先行する他県もあり余程特色のある構想でないとは容易ではない。ただ、薬学部を設置している国立大学では既に医学部も設置してあるが、富山大学だけは医学部がない。さればと言ってこれから富山大学に医学部を設置するのは過去の大学紛争の多くが医学部にその原点があったことを思うと難しい」との意向が示された。このことが、富山医科薬科大

学・構想の実現に拍車をかけることになり、49年7月26日には薬学部と和漢薬研究所の合同教授会の合意を得、つづく31日の富山大学評議会において同構想が了承された。それ以降、富山医科薬科大学の発足（50年10月1日）、翌51年4月の入学式に至るま

での経過は下記の概要に記されているようであった。

また、富山県当局ならびに医科薬科大学誘致期成同盟会の名のもとで、49年8月付で文部省に提出された50年10月開学要望書を転載した。

富山医科薬科大学設置経緯の概要

昭和 年月日

事 項 の 概 要

- 42 . 7 地方行政連絡会議において、富山県知事が知事全国知事会を代表して佐藤総理に医師充足対策について要望した。
- 43 . 8 知事が文部大臣に医学部設置について陳情した。
- 10 富山県に医学部問題研究会が設置された。
- 44 . 10 知事が文部大臣に対して陳情した。
- 47 . 6 . 1 知事が富山大学に対し医学部設置について要望した。
- 6 知事が文部省に対し医学部設置について要望した。
- 6 . 8 県庁内に国立富山大学医学部誘致推進本部を設置した。
- 6 . 22 国立富山大学医学部誘致期成同盟会が結成された。
- 6 知事が文部省、厚生省および自治省に対し医学部の創設について要望した。
- 7 期成同盟会が富山大学に対し医学部設置について要望した。
- 知事が金沢大学に対し医学部誘致に関して協力方を要請した。
- 知事及び金沢大学医学部長が新潟大学及び千葉大学に富山県の医学部誘致に協力方を要請した。
- 期成同盟会会長が、田中総理、自民党4役、文部省等に対し、医学部設置について要望した。
- 8 富山市議会自民クラブが富山市西金屋及び同市杉谷を医学部候補地として協力する旨知事に申し入れた。
- 9 富山県が医学部誘致問題懇談会（金沢、新潟、千葉の医学部長及び病院長を招へい）を開催し、教官確保を依頼するとともに関連教育病院整備について協議した。
- 富山市杉谷部落から県に対し、同部落総代及び土地所有者95名の連署押印をもって、同用地提供に同意する旨の同意書が提出された。
- 富山市議会が富山市に医学部を設置されたい旨の決議をした。
- 10 富山大学医学部設置検討委員会が開催された。
- 11 知事が、文部省、厚生省及び大蔵省関係者に対し医学部設置について要望した。
- 富山市富山大学医学部設置期成同盟会設置総会が開催された。
- 12 知事から富山市及び婦中町に対し、医学部用地の取得について協力方を依頼した。
- 知事が、文部大臣に対し医学部設置について要望した。
- 48 . 3 知事が、文部省、自民党関係者に対し医学部設置について要望した。
- 6 . 12 国立富山大学医学部誘致期成同盟会を国立富山医科大学誘致期成同盟会、国立富山大学医学部誘致推進本部を国立富山医科大学誘致推進本部に改称した。以後、単科の医科大学の誘致運動に切り替えた。

- 12.30 49年度予算案が閣議決定され、富山県のほか島根、高知、大分、佐賀の各県の医科大学（医学部）の創設調査費が計上された。
- 49.3.20 文部省大学学術局長から富山大学長に対し、富山県に国立の医学教育機関を創設するための準備事務の委嘱について依頼があった。
- 3.25 上記の準備事務の委嘱方依頼に対し、富山大学長が同意する旨回答した。
- 5.1 国立富山医科大学誘致推進本部を国立富山医科大学開学推進本部に改称した。
- 7.5 富山大学部局長懇談会において学長から、国立医学教育機関創設の方向として「富山医科薬科大学」とする構想につき薬学部及び和漢薬研究所の意向が問われた。
- 7.19 大学院薬学研究科委員会懇談会において、薬学部長から「富山医科薬科大学」構想の経緯について報告が行なわれた。
- 7.22 富山大学薬学部、和漢薬研究所合同教授会において、学長が「富山医科薬科大学」構想の経過説明を行なった。
- 23 富山大学和漢薬研究所教官懇談会において、和漢薬研究所長から「富山医科薬科大学」構想の経緯について報告が行なわれた。
- 富山大学評議会において富山県に置かれる国立医学教育機関創設準備室長として、金沢大学医学部平松博教授を推薦することが了承された。
- 7.25 富山大学薬学部、和漢薬研究所合同教授会において「富山医科薬科大学」構想について審議された。
- 7.26 富山大学薬学部、和漢薬研究所合同教授会において「富山医科薬科大学」創設に参加する方向で努力することが決定された。
- 富山大学臨時評議会において「富山医科薬科大学」構想について薬学部長から合同教授会の審議経過の説明が行なわれた。
- 7.31 富山大学臨時評議会において「富山医科薬科大学」構想が了承された。
- 8.2 文部省岩間事務次官が予定地を視察した。
- 8.6 国立富山医科大学誘致期成同盟会を国立富山医科薬科大学誘致期成同盟会に、国立富山医科大学開学推進本部を国立富山医科薬科大学開学推進本部に改称した。
- 財団法人・国立富山医科薬科大学協会設立総会が開催された。
- 8.8 富山大学が学長裁定により国立医科教育機関創設準備委員会要項を定め、国立医科教育機関創設準備委員会を設置した。
- 8.16 富山大学国立医学教育機関創設準備室が設置され、準備室長に平松金沢大学教授（医学部）が併任発令された。
- 創設準備委員会委員に小林新潟大学教授（医学部）が委嘱された。
- 富山大学国立医学教育機関創設準備室事務長が発令された。
- 9.2 文部省において国立医学教育機関創設準備打ち合わせ会が開催され準備大学の学長、準備室長、事務局長等関係者が出席した。
- 9.10 文部省大学局長から金沢大学長に対し、富山医科薬科大学の創設に関する施設関係準備事務の委嘱依頼がなされた。（9.24 同依頼に同意の旨回答）
- 50.1.10 昭和50年度予算案が閣議決定され富山医科薬科大学及び島根医科大学の創設（50年10月開学、51年4月学生受入）に要する経費が計上された。
- 1.22 大学設置審議会医学専門委員会が開催され富山医科薬科大学の基本構想などが審議された。
- 2.28 大学設置審議会医学専門委員会が開催され、継続審議となっていた富山医科薬科大学の基本構想等が審議され了承された。

- 3.14 富山大学評議会において、金沢大学医学部平松博教授を昭和50年4月1日付けをもって富山大学教授（専任）に任用することが了承された。
- 3.20 創設準備室長名で全国医科大学長又は医学部長あてに富山医科薬科大学教員推薦方依頼の公文書を発送した。
- 4.1 山口大学経理部長大島俊雄氏が大臣官房付（富山医科薬科大学事務局長予定者）に任命された。（4.2 創設準備室付に併任発令）
- 4.2 富山大学長裁定により「富山医科薬科大学創設準備組織要項」が制定された。富山大学教授（創設準備室付）平松博氏が富山医科薬科大学創設準備室長事務取扱に併任発令された。
- 4.22 国立学校設置法の一部を改正する法律が公布施行された。（富山医科薬科大学の50年10月開学が決定）
- 4.24 文部省において富山医科薬科大学および島根医科大学創設に関する事務打合せ会が開催された。
- 5.1 富山大学教授（創設準備室長事務取扱併任）平松博氏が富山医科薬科大学創設準備室長に併任発令された。
- 5.22/23 創設準備委員会において、医科教育教官選考の結果について平松室長から報告があり採用内定者が承認された。
- 6.19/20 学識経験者及び文部省関係官の現地調査が行なわれた。（学識経験者：懸田順天堂大学長、赤倉国立栃木病院長、諏訪東北大学医学部長）
- 7.7/8 創設準備委員会において、
1. 一般教育教員の選考結果について採用内定者が承認された。
 2. 富山医科薬科大学開学連絡会議設置要項（案）が承認された。
 3. 関連教育病院（県立中央病院）との協定書（案）及び暫定施設使用についての覚書（案）が了承された。
- 9.8 創設準備委員会において参与及び副学長（教育研究及び厚生補導担当）が選出された。
- 9.23 創設準備委員会において富山医科薬科大学創設委員会要項（案）が了承された。
- 9.30 富山医科薬科大学創設準備委員会及び創設準備室が廃止された。
- 10.1 国立学校設置法の一部を改正する法律（50年法律第27号）により富山医科薬科大学に関する規定が施行され同大学が発足した。事務局は県立総合衛生学院に置かれた。
- 10.12/13 大学設置審議会の現地調査が、伊藤静岡薬科大学長、懸田順天堂大学長、田村東大病院薬剤部長、山村東大教授の各委員によって行なわれた。
- 10.30 大学設置審議会医学専門委員会において教官審査が行なわれた。
- 51.4.14 富山医科薬科大学の第一回入学式が行なわれた。

国立富山医科薬科大学の昭和50年10月の開学について(要望)

昭和49年度の予算において、100万県民の悲願でありました「国立医学教育機関」の創設準備費が決定され、昭和51年4月の入学を目標に、創設のための諸準備が行なわれることになりましたことは、誠に感謝に堪えない次第であります。また、このほど、関係御当局の手により新設される大学は、富山大学の薬学部および和漢薬研究所を含めて薬業県としての本県にふさわしい全国にも例をみない特色ある医薬総合の医科薬科大学とする新構想が打出されました。

この医科薬科大学が実現すれば、本県の伝統産業である薬業の発展は申すまでもなく、西洋医学と和漢薬を中心とした東洋医学との融合、薬理臨床の研究の一体化など、わが国の医学、薬学の進歩向上のためにも画期的な成果が期待されるものと信じます。衷心からこの構想を歓迎するとともに、一日も早い実現を望む次第であります。

本県では、すでにこの医科薬科大学の50年10月の開学に備え、富山市杉谷地内に36.5haの用地を取得し、文部省及び準備大学の御指示のもとにこの整地造成の準備を進めているほか、関連道路の整備、上下水道等エネルギー・サプライ施設の整備にも着手いたしております。

さらに、関連教育病院として県立中央病院の増改築および臨床教官暫定研究施設の整備についても、鋭意進捗を期しております。また、看護職員の確保については、本年度から県立総合衛生学院において40名の第一次増募を図りました。このほか、県職員住宅、解剖体確保等にも万全の準備を進めております。

また、今後文部省および準備大学中心に、校舎、付属病院の建設、図書、校具、医療機械等の設備充実が順次進められることとなりますが、これが早急かつ円滑な内容充実を期するため財団法人国立富山医科薬科大学協力会の設置を図りました。

つきましては、なにとぞ100万県民の悲願に御賢察を賜り、昭和50年度予算に国立富山医科薬科大学の創設費を計上賜り、同年10月に開学を図っていただくよう格段の御高配をお願い申し上げます。

昭和49年 8月

富山県知事 中田幸吉

国立富山医科薬科大学誘致期成同盟会

会長 富山県知事 中田幸吉

なお、薬学部および和漢薬研究所の富山医科薬科大学への移行に係る教育・研究の経過措置は以下のようになされた。

1) 富山医科薬科大学・薬学部は昭和51年4月発足したが、富山大学薬学部および薬学研究科修士課程は同54年3月まで存続し、博士課程前期・後期(医薬大)は53年4月に同時発足するという異例の措置となった。

2) 講座および部門の移行年次

薬学部講座

昭和51年4月 薬化学、薬品作用学、薬品物理化学

昭和52年4月 薬品分析化学、生薬学、薬品合成化学、生物薬品製造学

昭和53年4月 薬剤学、薬剤製造学、薬品製造工学、薬品製造化学、環境衛生分析学

昭和54年4月 衛生化学、薬品生物学

研究所部門

資源開発、生物試験、臨床応用、病態生化学、化学応用の全5部門は昭和53年6月に移行。